

平成元年度

市原市内遺跡群発掘調査報告

潤井戸上横峰遺跡

椎津茶ノ木遺跡

姉崎上野合遺跡

喜多徒士橋遺跡

1990・3

市原市教育委員会

序 文

市原市は房総半島の中ほどにあつて、温暖な気候と豊かな自然とに恵まれ、古くより多くの人々が生活を営んできたところでもあります。

このことは、県下でも有数の貝塚であります能満分区貝塚や西広貝塚などをはじめとして、「王賜」銘鉄剣が発見されました稲荷台一号墳さらには奈良時代中頃に造営がなされました上総国分僧寺・国分尼寺などに代表されるところであります。

一方、本市は首都圏に位置することから、地域開発が急速に進展しております。地域開発は、現代に生きる住民にとってよりよい生活環境を提供するものでありますが、その反面、祖先が残してきた貴重な文化遺産の破壊につながることもあり、文化財保護と開発との調和をはかりつつ、これらを後世の人々に伝えていかなければならないところであります。

このような状況の中で、今回国庫及び県費の補助を受けまして、市内に所在する遺跡について開発との調和をはかるべく調査を実施し、遺跡の性格などを把握することができました。本書はその成果をまとめたものであり、文化財の啓蒙と普及に広く活用されることを願うものであります。

最後に、今回の調査を実施するにあたりご指導・ご協力を賜りました文化庁・千葉県教育庁文化課・財団法人市原市文化財センターならびに関係諸機関に対しまして、心より感謝を申し上げる次第であります。

平成 2 年 3 月

市原市教育委員会
教育長 星野 一郎

例 言

1. 本書は国費・県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡群における発掘調査の報告である。
2. 発掘調査及び整理事業は文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の依頼により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行については市原市教育委員会で行った。
3. 今年度実施した発掘調査は下記のとおりである。
 - (1) 潤井戸上横峰遺跡(センター調査コードセ 104)市原市潤井戸字上横峰 617 - 4 ほか
調査 民間事業者の宅地造成に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。調査面積は 1,633 m²のうち 163 m²である。
調査期間 平成元年 7 月 10 日～7 月 17 日
 - (2) 椎津茶ノ木遺跡(センター調査コードセ 105)市原市椎津字茶ノ木 545
調査 民間事業者の宅地造成に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。調査面積は 2,639 m²のうち 264 m²である。
調査期間 平成元年 7 月 18 日～7 月 26 日
 - (3) 姉崎上野合遺跡(センター調査コードセ 106)市原市姉崎字上野合 1818 - 1 ほか
調査 民間事業者の宅地造成及び個人住宅建設に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。調査面積は 1,270 m²のうち 127 m²であり、このうち個人住宅建設地である 330 m²に対して本調査を実施した。
調査期間 (確認調査) 平成元年 7 月 27 日～7 月 31 日
(本調査) 平成元年 8 月 1 日～8 月 30 日
 - (4) 喜多徒土橋遺跡(センター調査コードセ 108)市原市喜多字徒土橋 771 - 1 ほか
調査 民間事業者の宅地造成に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。調査面積は 1,865 m²のうち 186 m²である。
調査期間 平成元年 8 月 31 日～9 月 11 日
4. 本書の原稿執筆は、木對和紀が行った。
5. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の 1 : 25,000 蘇我・姉崎及び市原市発行の市原地形図 C - 7、D - 7、E - 2・3、F - 2 である。

本文目次

序 文

例 言

財団法人市原市文化財センター組織表

第1章 調査遺跡の位置と環境	1
第2章 潤井戸上横峰遺跡	5
第3章 椎津茶ノ木遺跡	9
第4章 姉崎上野合遺跡	15
第5章 喜多徒士橋遺跡	33
第6章 総 括	37

挿 図 目 次

調査遺跡の位置と環境

第1図 対象遺跡周辺の主な遺跡分布図 … 2

潤井戸上横峰遺跡

第2図 潤井戸上横峰遺跡調査範囲と周
辺地形図 …………… 5

第3図 調査範囲と遺構配置図 …………… 6

第4図 5号・6号遺構実測図及び遺跡
内出土遺物実測図 …………… 7

椎津茶ノ木遺跡

第5図 椎津茶ノ木遺跡調査範囲と周
辺地形図 …………… 9

第6図 調査範囲と遺構配置図…………… 10

第7図 出土遺物実測図…………… 10

第8図 1トレンチ実測図及び出土遺物
実測図…………… 12

姉崎上野合遺跡

第9図 姉崎上野合遺跡調査範囲と周
辺地形図…………… 15

第10図 調査範囲と遺構配置図…………… 16

第11図 2号・3号遺構実測図 …………… 18

第12図 2号遺構出土遺物及び3号遺構
実測図…………… 19

第13図 3号遺構及び5・8・11トレン
チ出土遺物実測図…………… 20

第14図 4号遺構及び出土遺物実測図1 … 21

第15図 4号遺構出土遺物実測図2 …… 22

第16図 5号・6号遺構実測図 …………… 23

第17図 5号遺構出土遺物実測図1 …… 26

第18図 5号遺構出土遺物実測図2 …… 27

第19図 7号遺構及び出土遺物実測図… 29

第20図 7号遺構出土遺物実測図…………… 30

第21図 8号・9号遺構実測図及び9号
遺構出土遺物実測図…………… 31

第22図 遺構外出土遺物実測図…………… 32

喜多徒士橋遺跡

第23図 喜多徒士橋遺跡調査範囲と周
辺地形図…………… 33

第24図 調査範囲と遺構配置図…………… 34

第25図 1号・6号遺構実測図及び遺構
外出土遺物実測図…………… 35

表 目 次

第1表 周辺の主な遺跡……………	3	第6表 上野合遺跡5号遺構出土遺物観察表	……………	24・25
第2表 茶ノ木遺跡出土遺物観察表 ……	13	第7表 “ 7号遺構出土遺物観察表	……………	28
第3表 上野合遺跡新旧番号一覧表 ……	16	第8表 喜多徒土橋遺跡検出遺構一覧表	……………	34
第4表 “ 2号遺構出土遺物観察表	……………			
	19			
第5表 “ 4号遺構出土遺物観察表	……………			
	22			

図 版 目 次

図版1・5 潤井戸上横峰遺跡	図版2～8 姉崎上野合遺跡
図版1・2・5 椎津茶ノ木遺跡	図版4・8 喜多徒土橋遺跡

財団法人市原市文化財センター組織表(平成元年度)

役員

理事長	星野一郎(教育委員会教育長)
副理事長	大野義規(教育委員会社会教育部長)
常務理事	須田昇三(専任)
理事	滝口 宏(早稲田大学名誉教授)
理事	寺村光晴(和洋女子大学教授)
理事	海上信久(姉崎神社宮司)
理事	根本正夫(市企画部長)
理事	宮崎芳雄(市総務部長)
理事	地引希壹(市都市部長)
理事	安藤隆一(市財務部財政課長)
監事	佐久間章(市会計課長)
監事	小宮 仁(教育委員会総務課長)

職員

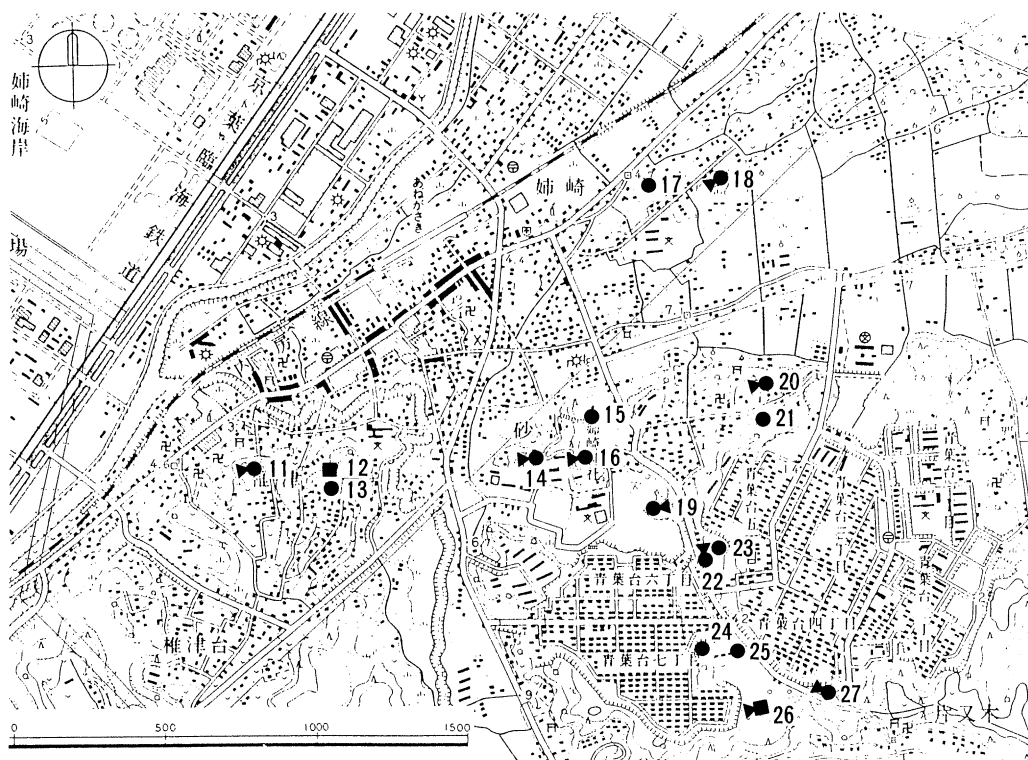
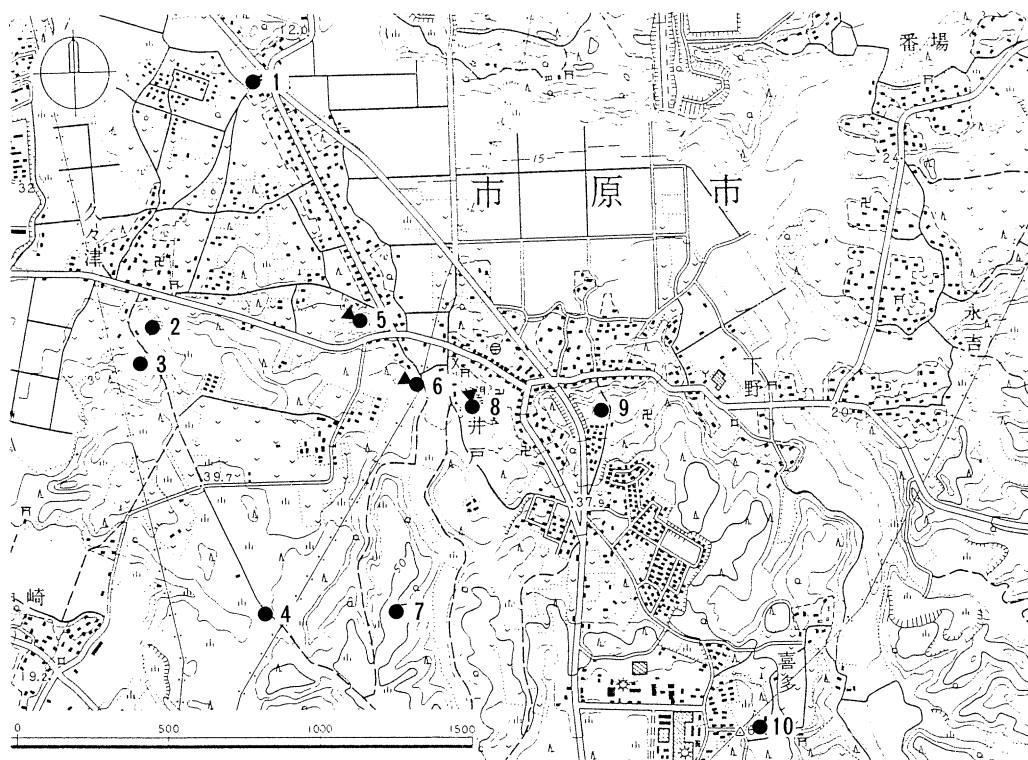
庶務課	課長	田丸萬富
	主事	大鐘光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ
調査課	課長	矢戸三男
	係長	宮本敬一
	主任調査研究員	田中清美
	主任調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村 直
	調査研究員	近藤 敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	木對和紀
	調査研究員	忍澤成視
	調査研究員	田中茂良
	調査研究員(嘱託)	田中新史
	調査研究員(嘱託)	半田堅三
	事務員(嘱託)	高浦貞子

第1章 調査遺跡の位置と環境

今年度の市内遺跡群関係の調査は、潤井戸・姉崎地域に集中し、検出された遺構・遺物は古墳時代以降を中心とするものであった。潤井戸地域はかつての菊間国造支配下圏に、また姉崎地域はかつての上海上国造支配下圏にそれぞれ比定されている地域でもあり、現存する顕著な古墳の分布のみならず、県下でも有数の大型前方後円墳が集中する地域でもある。ここでは両地域におけるこれまで調査が実施された遺跡を中心として、各地域における該当期の様相を捉えることにしたい。

潤井戸上横峰遺跡及び喜多徒土橋遺跡は第1図9・10の番号を付した地点にそれぞれ所在している。中央に小支谷を挟んで西は神崎川、東は喜多川の形成する台地上に位置しており、北にはそれぞれの河川が合流する別名境川と称される村田川が流れている。この村田川北岸地域は大規模な開発に伴う広範囲にわたる発掘調査が実施されており、草刈遺跡やこれに隣接する草刈六之台遺跡・川焼台遺跡などこの地域では宮の台式期以降の多数の遺構が検出されている。これに対する南岸、すなわち今回市内遺跡群関係で調査を実施した潤井戸・喜多地域は極めて断片的な調査が多く全貌は不明な点も多いが、神崎川に面する西側舌状台地先端部には西山遺跡が存在している。ここでは古墳時代前期～後期に至る24軒の住居跡が検出されている。また奈良時代以降では住居跡1軒の他に掘立柱建物跡と四脚門を伴う柵列塀が検出されており、注目すべき遺跡である。これより西側に南下するとさらに一段高くなった西側に突出する舌状台地上に居鞍古墳群が存在する。群中4基のうち前期の方墳と中期以降に下る円墳が調査された。この古墳群眼下南に天王台遺跡が存在し、弥生時代終末～古墳時代前期にかけての住居跡2軒と木棺墓1基が検出されている。さらに南には中潤ヶ広1号墳が存在し、古墳時代後期に比定される円墳が調査されている。この天王台遺跡と中潤ヶ広1号墳を結ぶ台地上には、肉眼においても墳丘の存在が顕著に観察される30数基からなる天王台古墳群が存在している。

さて西山遺跡の東側を南下していくと前方後円墳の存在が顕著に認められる。まず全長60mの杉山古墳、続いて33mの山王後古墳が存在し、支谷を挟んで対岸には全長45mの小谷1号墳が存在している。山王後古墳は6世紀代の築造と考えられており、直刀2点と鉄鏃1点が検出されている。小谷1号墳は6世紀後葉に比定される60個体以上の円筒埴輪列が墳丘中段面において検出されている。この両古墳間の支谷を南下すると下鈴野遺跡が存在する。ここでは弥生時代終末～古墳時代前期にかけての住居跡34軒と古墳時代前～中期にかけての円墳5基が検出され、その後一旦墳墓の造営活動はおさまるものの、奈良時代以降には再び墳墓群が造営され始めている。現在の所、潤井戸・喜多地域における広範囲な発掘調査例はこの下鈴野遺跡のみ



第1図 対象遺跡周辺の主な遺跡分布図(1:25,000)(国土地理院発行地形図)

であり、村田川北岸地域における各遺跡の相互関係の集積ほど南岸地域は集積されておらず、各遺跡における相互関係は不明と言わざるを得ない。しかしながら、調査が実施された各遺跡においては、菊間国造の奥津城と考えられる菊間古墳群や周辺の遺跡と対比してもあまりにも貧弱であり、少なくとも古墳時代前期の段階においては一つの文化の従属的存在であったろうということが垣間見られるのである。

一方椎津茶ノ木遺跡及び姉崎上野合遺跡は、第1 図13・17の番号を付した地点にそれぞれ存在している。北・西に東京湾を望み、椎津川の形成する西側の台地上には茶ノ木遺跡が存在し、姉崎古墳群の大部分が集中する東側台地の下旧浜堤上に上野合遺跡が存在している。この地域は上海上国造の奥津城と考えられており、県下でも有数の大型前方後円墳が存在する地域でもある。このうち二子塚・山王山・原1号・鶴窪・六孫王原古墳がそれぞれ一部を調査されており、特に二子塚前方部出土とされる直弧文付石枕、銀製垂飾付耳飾りや、山王山古墳出土の金銅製天冠、45本以上の矢を納めた胡籥、銀製環頭太刀は秀品であると共に、被装者の生前の権力を知る上で極めて重要な遺物である。集落跡としては毛尻・六孫王原遺跡や原遺跡などが調査されており、弥生時代～古墳時代後期初頭における、拠点的な集落跡も検出されている。ただしこれらの台地上集落跡に関しては、古墳時代後期初頭以降の住居跡等が検出されていないことから、古墳造営に伴う集落跡等が周辺に存在しているものと考えられていた。今回の調査において、椎津茶ノ木遺跡は弥生時代～奈良・平安時代にかけての遺物が検出されているが、とりわけ古墳時代後期の遺物が大量に出土していることから、当遺跡は鬼高期を主体とする遺跡であろうと考えられる。また姉崎二子塚の西へおよそ100mの地点に存在する姉崎上野合遺跡は古墳時代中期和泉式期を中心とする集落跡が検出されたことから、この様な低地にまで当期の集落が下って来ている事実など、姉崎地域における古墳時代全体を通しての集落のあり方などが次第に明らかになりつつある。椎津茶ノ木遺跡・姉崎上野合遺跡とも引き続き本調査が実施される予定であり、その結果によってより全貌は明らかにされるであろう。

第1表 周辺の主な遺跡

No.	遺跡名	性格	No.	遺跡名	性格	No.	遺跡名	性格
1	潤井戸西山	集落跡	10	喜多徒士橋	集落跡	19	鶴窪古墳	全長(60m)前方後円?
2	" 居鞍	古墳群	11	外郭古墳	全長80～85m前方後円	20	姉崎天神山古墳	全長125m前方後円
3	" 天王台	集落跡	12	椎津稲荷山古墳	古墳	21	" 東原	集落跡
4	中潤ヶ広	古墳	13	椎津茶ノ木	集落跡	22	原1号墳	全長70m前方後円
5	杉山古墳	全長60m前方後円	14	姉崎山王山古墳	全長69m前方後円	23	原	集落跡
6	潤井戸山王後古墳群	全長33m前方後円	15	" 宮山	集落跡	24	毛尻	集落跡
7	下鈴野	古墳、集落跡	16	釈迦山古墳	全長79～91m前方後円	25	六孫王原	集落跡
8	潤井戸小谷1号墳	全長45m前方後円	17	姉崎上野合	古墳、集落跡	26	六孫王原古墳	全長45m前方後円
9	" 上横峰	古墳、集落跡	18	" 二子塚古墳	全長110m前方後円	27	壺頭古墳	全長45m前方後円

第1表 遺跡関係文献等

1. 鈴木英啓 『潤井戸西山遺跡』(財)市原市文化財センター 1986
2. 昭和63年度(財)市原市文化財センター調査
3. 木對和紀 『中潤ヶ広・天王台遺跡』(財)市原市文化財センター 1988
4. 近藤 敏 『市原市文化財センター年報昭和60年度』(財)市原市文化財センター 1985
3に同じ
5. 1に同じ
6. 1975年東京電力の鉄塔建設時に市原市教育委員会が調査 直刀2点と鉄鏃1点を検出
7. 大村 直 『下鈴野遺跡』(財)市原市文化財センター 1987
8. 高橋康男 『第4回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』 1989
12. 石枕が出土したとの伝承がある。
14. 大場磐雄他 『姉崎山王山古墳』市原市教育委員会 1963
 〃 「市原市姉崎山王山古墳」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会 1964
15. 昭和61年度(財)市原市文化財センター調査
16. 18・28の報告書に詳しい。
18. 千葉県市原郡教育会 『市原郡誌』千葉県市原郡役所 1916
 「姉崎町二子塚及大塚古墳」『史蹟名勝天然記念物調査第6輯』千葉県 1929
 大場磐雄他 「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌第37巻3号』 1952
 亀井正道 「姉ヶ崎二子塚古墳の銀製耳飾」『千葉県立上総博物館報第31号』千葉県立上総博物館 1978
19. 昭和56年市原市教育委員会に於て測量および確認調査のみ実施
20. 昭和49年明治大学に於て測量調査のみ実施
21. 昭和62年度(財)市原市文化財センター調査
22. 大場磐雄他 『原一号墳発掘調査概報』千葉県教育委員会 1971
23. 越川敏夫他 『原遺跡』原遺跡調査会 1984
24. 平岡和夫他 『毛尻遺跡発掘調査報告書』 1983
25. 昭和63年度(財)市原市文化財センター調査
26. 中村恵次他 「前方後方墳の一考察—千葉県市原市六孫王原古墳の調査」『古代第55号』早稲田大学考古学会 1973
 古墳時代研究会 「千葉県市原市六孫王原古墳の調査」『古墳時代研究Ⅱ』古墳時代研究会 1975
27. 18・28の報告書に詳しい。

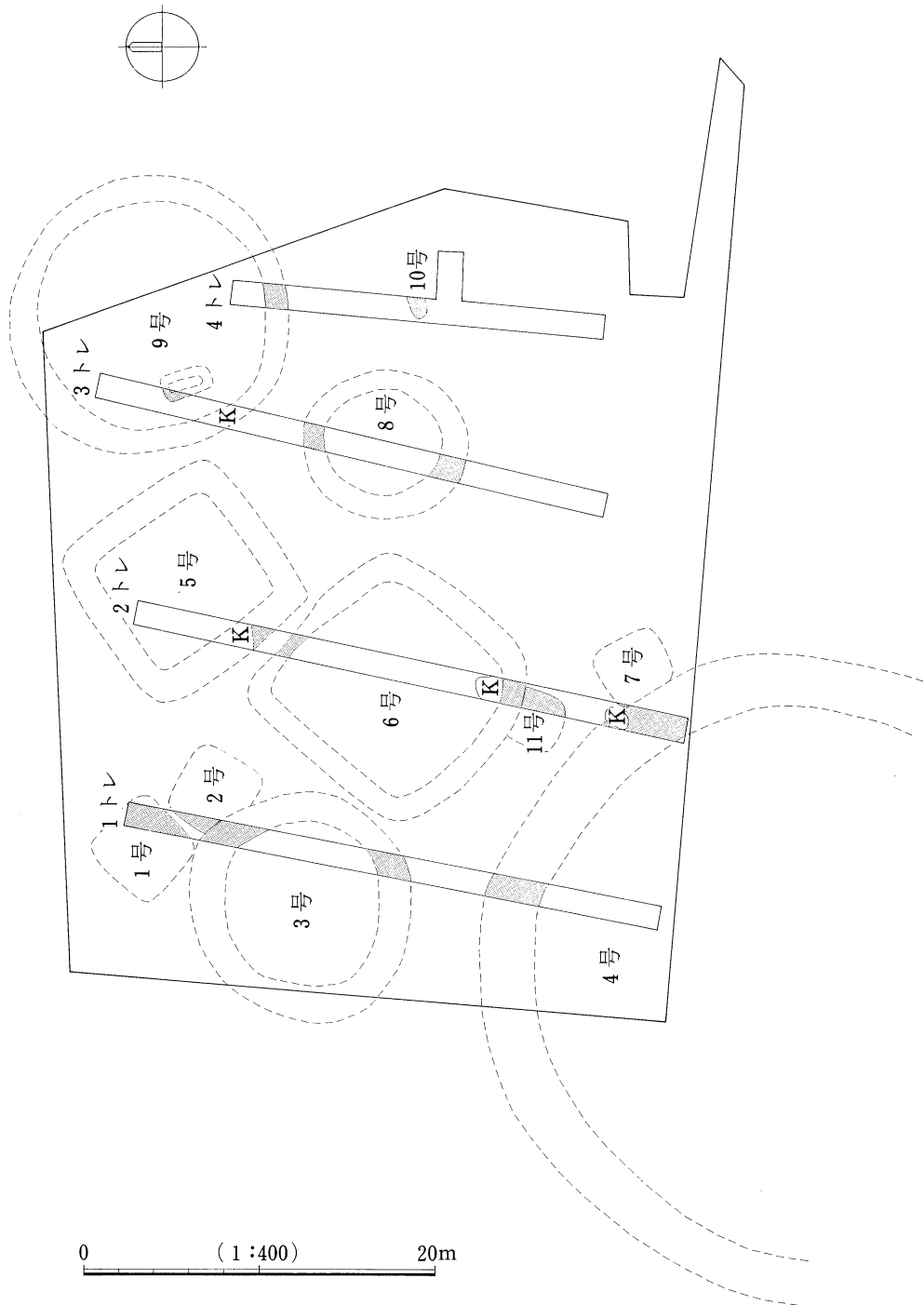
第2章 潤井戸上横峰遺跡

概要 潤井戸上横峰遺跡は村田川南岸、標高およそ38m前後の舌状台地突端部に位置し、下野遺跡群(下野寺谷古墳群)の一面を占める遺跡でもある。調査は対象面積1,633㎡の10%にあたる163㎡に対して行われた遺構確認調査であり、この結果遺構は最も遺存状況の良好な所でも何らかの形で攪乱を受け、特に2・3トレンチ北側付近はハードルーム層以下に達する削平を受けていた。遺跡そのものの遺存状況は必ずしも良好とは言えないものの、対象地域ほぼ全域にわたる遺構が確認されている。

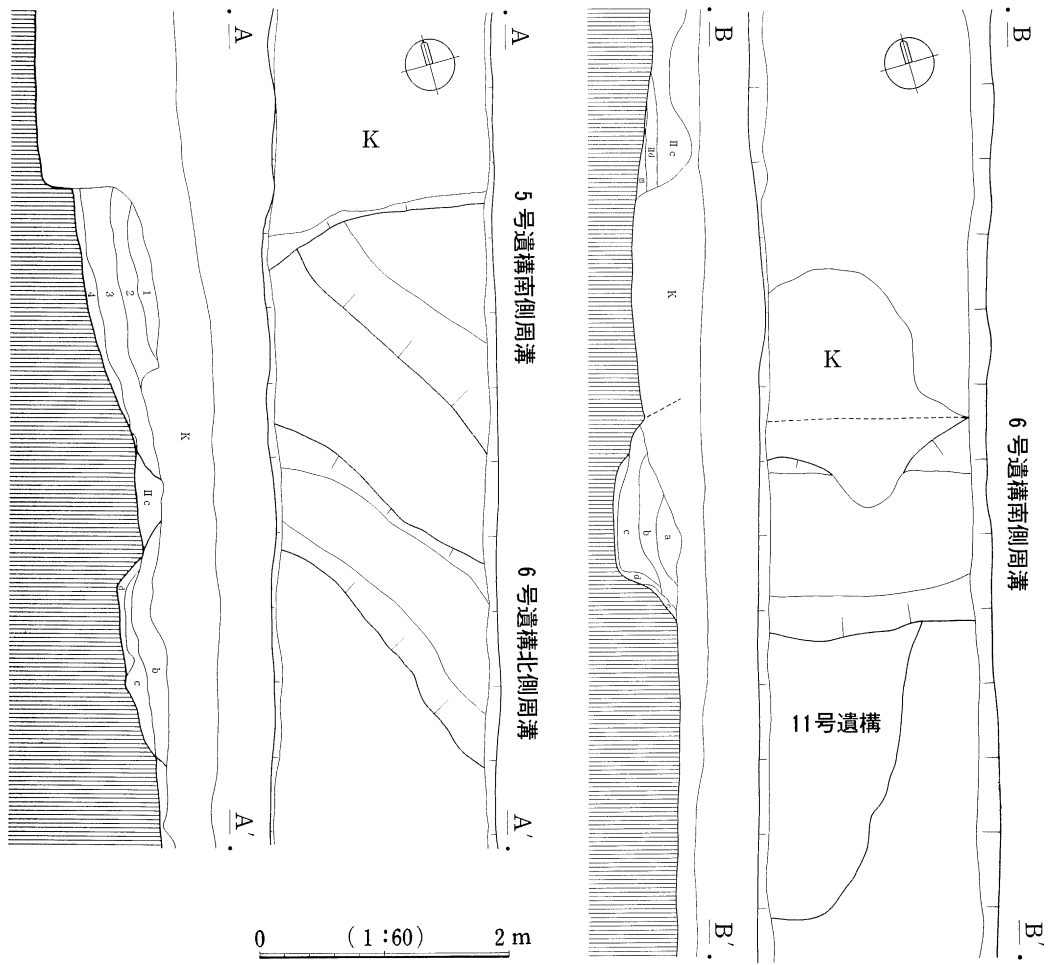
今回の調査によって確認された遺構は古墳(周溝墓)6基、住居跡4軒、土壌1基であり、このうち5・6号遺構の周溝の一部を精査し、性格・状況を把握した。



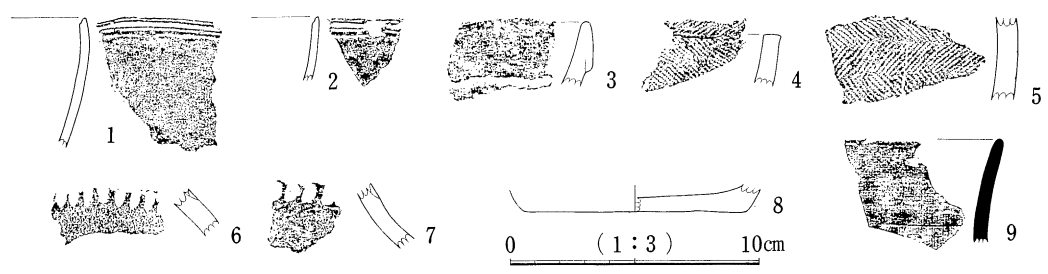
第2図 潤井戸上横峰遺跡調査範囲と周辺地形図



第3図 調査範囲と遺構配置図



- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | 攪乱土に含まれたロームBが圧力によって若干混入する有機質土。 | a 黒褐色 | 有機質性強、ローム粒若干含む。 |
| 2 暗褐色 | ローム粒若干含む。 | b 暗褐色 | 有機質性強、ローム粒を霜降状に少量含む。 |
| 3 黒褐色 | 有機質性強、ローム粒等をほとんど含まない。 | c 暗褐色 | 有機質性強、ローム粒を霜降状に多量に含む。 |
| 4 暗褐色 | ローム粒多量に含み色調やや明るい。 | d 暗褐色 | 有機質性やや強、ローム粒多量・ロームB少量含む。 |
| | | e 暗褐色 | ローム粒多量に含む。 |



第4図 5号・6号遺構実測図及び遺跡内出土遺物実測図

以下調査にかかわる遺構・遺物について概説する。なおトレンチ・遺構番号については調査段階のものをそのまま使用し、挿図方位は磁北を示す。

遺構と遺物(図版1・5)

5号遺構 2トレンチ北側に検出した古墳(周溝墓)である。前述した削平のため南側周溝の半分以上はすでに削平されており、規模等については不明瞭であるが、現存した周溝部分より幅2m深さ60cm前後を呈していたものと推定される。壁は比較的ゆるやかに立ち上っている。遺物はまったく検出されなかった。

6号遺構 2トレンチ中央に検出された古墳(周溝墓)である。重機による削平のために現況における盛土の存在は認められない。南北周溝とも削平を受けているが、南側周溝における規模は、幅1.7m前後、深さは確認面より60cm前後を測り断面は逆台形を呈するものと考えられる。周溝内より土器片5点を検出したが(第4図1～5)いずれも11号住居跡覆土との境に検出されており、本遺構に直接伴うものではないと考えられる。

その他の遺物

この他4点の図示可能な遺物が検出されている。いずれも覆土を掘り下げていない為、該当遺構に伴うものとの断言は差し控えたいが、第4図6・7・8は久ヶ原式期に比定される甕形土器の破片であり、2号住居跡の覆土上面より検出されている。9は須恵器長頸壺?の口辺部であり3号遺構周溝南側覆土上面から検出されている。

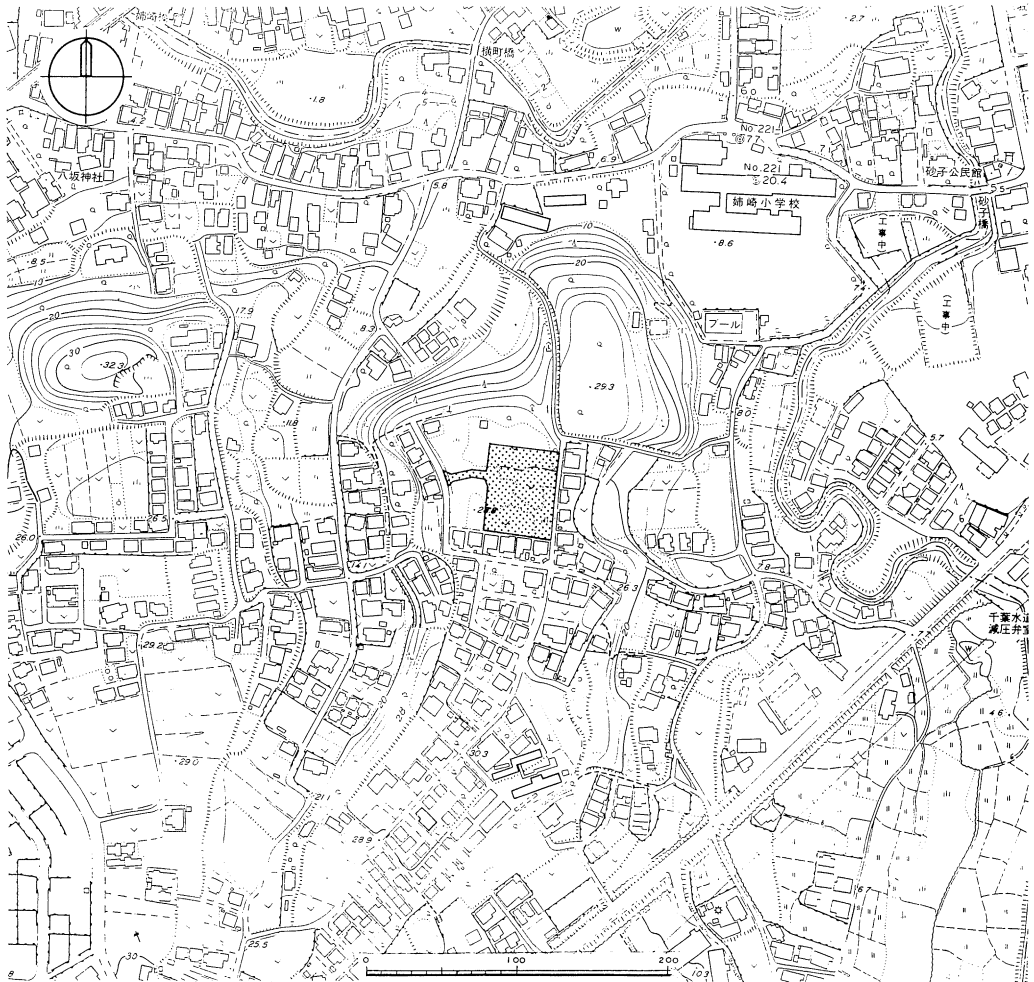
まとめ

今回の調査における成果は、下野遺跡群(下野寺谷古墳群)の一面を占める本遺跡が、やはり古墳群たる内容を有する遺構の検出を垣間見た所にある。これらの遺構はマウンド等を完全に削平されたものばかりであるが、9号遺構には主体部と推察される土壙を伴っていることや、径30m前後で比較的大型な規模と考えられる4号遺構などを検出している。詳細については本調査を行っていない為不明瞭なところもあるが、隣接する地域には、現況においてもマウンドを保持する古墳が顕著に認められることから、今後この地域の調査には十分な注意が必要であろう。また11号遺構に伴うものと考えられる土器群の中に口唇部内面に2条の沈線を有する土器が検出されており、これらの土器群と遺構の関係などすべては本調査の実施を待つことにしたい。

最後に確認された遺構はすべて破線によって復原しておいたが、規模・形状については本調査実施の折に変更する可能性があることを申し加えておく。

第3章 椎津茶ノ木遺跡

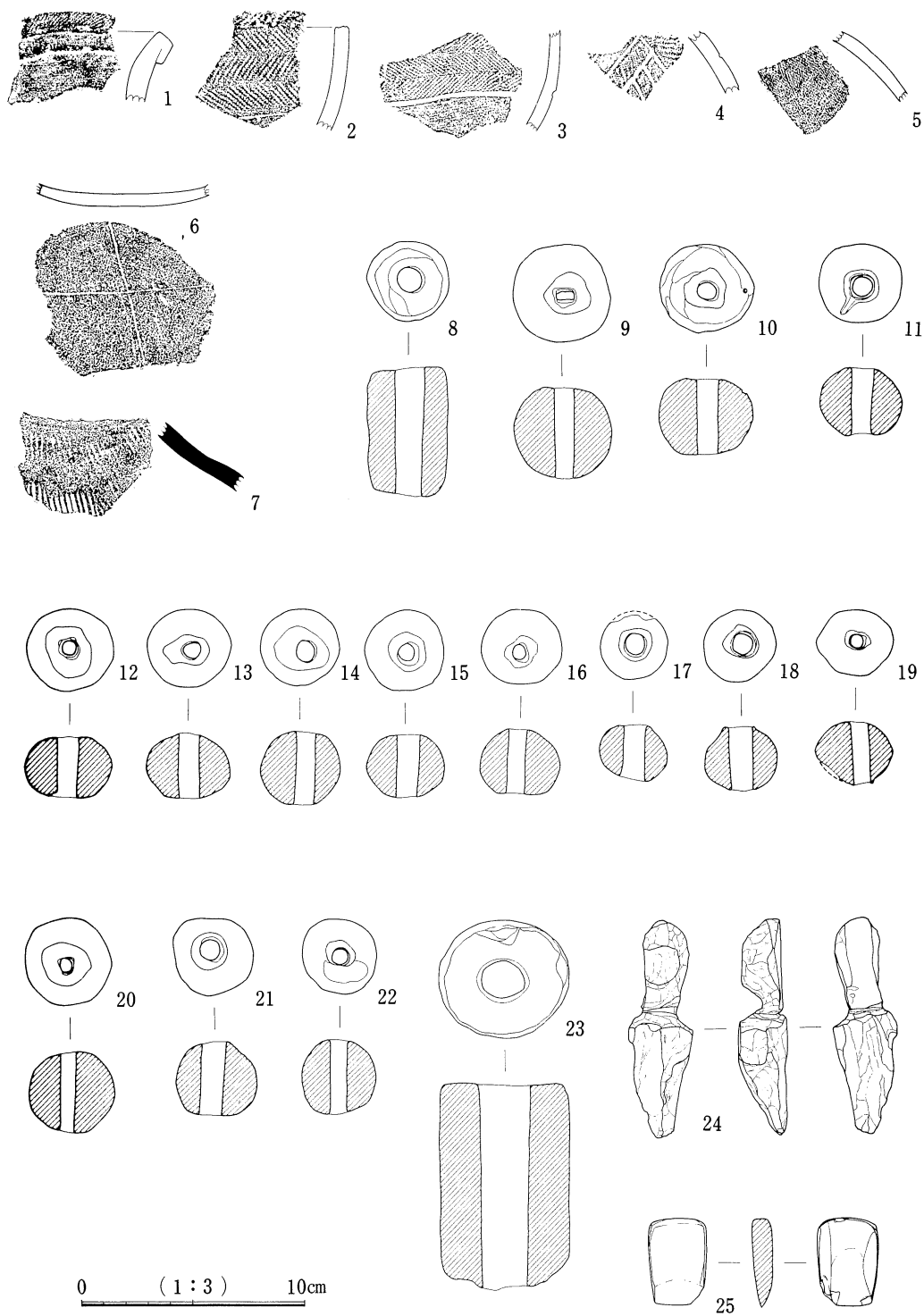
概要 椎津茶ノ木遺跡は標高およそ29m、東に東京湾を眼下とし西に椎津川を挟んで姉崎神社の杜を望む舌状台地上に位置している。遺跡は椎津城跡の一面を占めており、また石枕が出土したという伝承の存在する椎津稻荷山古墳が存在している。調査は対象面積2,639㎡の10%である264㎡に対して行われた遺構確認調査であり、古墳周溝や貝ブロックの他に竪穴式住居跡多数が対象区域全域にわたって検出されている。このうち1トレンチ検出の古墳周溝と思われる部分を掘り下げ、性格・状況を把握した。以下調査に関する遺構・遺物について概説する。なおトレンチ番号は調査時段階のものをそのまま使用し、挿図方位は磁北を示している。また極めて多数に及んだ遺構については、継続して行われるであろう本調査時に規模・プラン等が



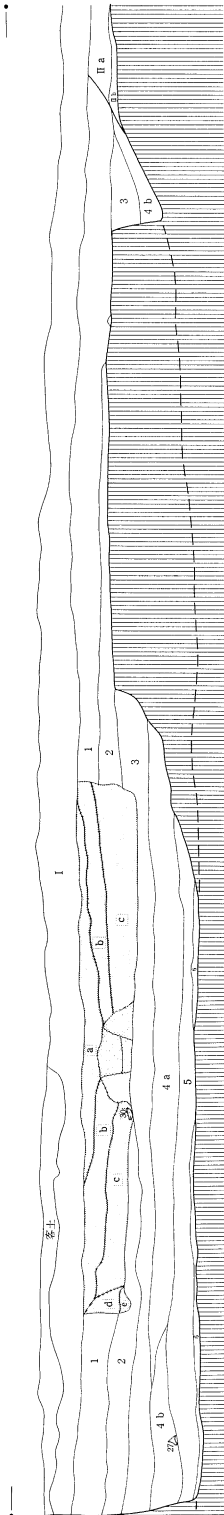
第5図 椎津茶ノ木遺跡調査範囲と周辺地形図



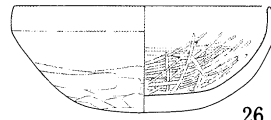
第6図 調査範囲と遺構配置図



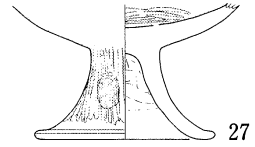
第7图 出土遗物实测图



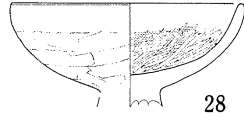
0 (1:120) 4 m



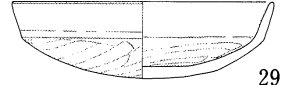
26



27



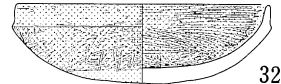
28



29



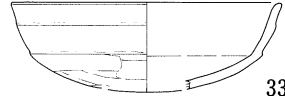
30



32



31

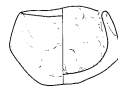


33

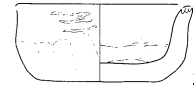
0 (1:4) 10cm



34



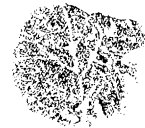
35



36



37



0 (1:3) 10cm

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 暗褐色 ローム粒、焼土粒散る締りやや弱 2 暗褐色 ローム粒、ロームB散るやや締る 3 暗褐色 ローム粒、ロームBやや多く含む。遺物を多量に含む。 4 a 暗褐色 ローム粒、ロームB多量に含む。粘性強く締る。 4 b 暗褐色 ローム粒、ロームB多量に含む。粘性締りはa層に比べやや弱い、遺物を多量に含む。 5 暗褐色 粒の細かいローム粒多量に霜降り状に含み締る。 6 褐色 ローム粒、ロームB多量に含む。周溝底面直上土。 a 暗褐色 ローム粒、少量含む。やや締る。 b 黒褐色 ローム粒、若干散る。有機質性強く締る。 c 暗褐色 ローム粒、焼土粒、粘土B少量含み締る。図30.31の他、遺物を多量に含む。 d 黒褐色 ローム粒、霜降り状に少量に含む。 e 暗褐色 ローム粒、少量含む、締り弱い。 | <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="font-size: 2em; margin-right: 5px;">}</div> <div style="margin-left: 5px;">古墳</div> </div>

<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="font-size: 2em; margin-right: 5px;">}</div> <div style="margin-left: 5px;">住居跡</div> </div> |
|--|---|

第8図 1 トレンチ実測図及び出土遺物実測図

変更する場合もありえることから本調査実施の折に委ねることにしたい。

遺構と遺物(図版1・2・5)

本遺跡から検出された遺構・遺物の一部を第7・8図にまとめた。時期的には弥生時代～奈良・平安時代に比定されたものである。このうち1～4及び25を除くすべての図示した遺物は1トレンチ古墳周溝及び住居跡覆土からの検出である。8は管状土錘、9～22は土玉であり、魚撈関係の遺物である。23は鞆羽口であり先端部は欠損している。また図示に至らなかったが鉄滓も検出している。24は用途不明の石製未成品であり、上部と下部を削り取るかあるいは極

第2表 茶ノ木遺跡出土遺物観察表

図番	名称	法量 cm/g			色調	焼成	胎土	図番	名称	法量 cm/g			色調	焼成	胎土
		最大径	孔	重量						最大径	孔	重量			
8	管状土錘	3.7	1.3	95.9	淡褐色	良好	密微砂粒含む	16	土玉	3.6	0.8	34.2	淡褐色	良好	密微砂粒含む
9	土玉	4.4	0.9	80.5	淡褐色	良好	密微砂粒含む	17	土玉	3.0	1.0	19.3	暗褐色	良好	密微砂粒含む
10	土玉	4.2	0.9	60.4	茶褐色	良好	密微砂粒含む	18	土玉	3.2	1.1	28.0	暗褐色	良好	密微砂粒含む
11	土玉	3.7	1.0	32.3	茶褐色	良好	密微砂粒含む	19	土玉	3.4	0.8	25.5	暗褐色	良好	密微砂粒含む
12	土玉	4.9	1.0	40.4	茶褐色	良好	密微砂粒含む	20	土玉	3.8	0.7	52.7	茶褐色	良好	密微砂粒含む
13	土玉	4.3	0.9	38.1	茶褐色	良好	密微砂粒含む	21	土玉	3.5	1.1	39.1	茶褐色	良好	密微砂粒含む
14	土玉	3.5	0.8	38.8	茶褐色	良好	密微砂粒含む	22	土玉	3.3	0.8	25.5	淡褐色	良好	密微砂粒含む
15	土玉	3.5	1.0	36.4	淡褐色	良好	密微砂粒含む	23	鞆羽口	5.8	2.5	31.0	暗褐色	良好	密微砂粒含む
図番	器種 遺存度	法量(推定) cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考						
		口径	底径	器高											
26	壺 1/3	(14.8)	—	5.6	良好	外淡暗褐色	密	外口唇部ナデ、体部ケズリ 内ミガキ	内面赤彩 底部は平底状に近い。						
27	高坏 脚4/5	—	—	9.8	良好	外茶褐色	密	外坏部～脚部ケズリ後ミガキ、裾ナデ 内坏部ミガキ、脚部ケズリ、裾ナデ	坏部内面赤彩						
28	高坏 脚欠	12.5	—	—	良好	赤茶褐色	密	外口唇ナデ、体部ケズリ 内口唇ナデ、体部ヘラナデ後ミガキ	(赤彩)非常に丁寧に作られる。						
29	坏(蓋) 1/2強	14.0	—	4.1	良好	赤茶褐色	密	外口唇ナデ、体部ヘラケズリ	非常に丁寧に作られる。 内外面赤彩						
30	蓋 2/3	13.9	—	4.4	良好	青灰色	白色微砂粒多	ロクロ、胴中位～底部にかけて、時計回りの回転ヘラケズリ	須恵器						
31	坏 1/8	(11.9)	—	(3.7)	良好	青灰色	白色微砂粒少	ロクロ	須恵器						
32	坏 3/4	13.7	—	4.2	良好	内外暗褐色	密	外口唇ナデ後ミガキ、体部ケズリ後ミガキ、 底部剥離激しく不明 内口唇ナデ後ミガキ、体部ミガキ	内外面共黒色処理されるが、後に黒色部分がとぶ。 丁寧に作られる。						
33	坏 1/4	(14.6)	—	(4.7)	良好	内外暗～淡褐色	密	外口唇ナデ、体部ケズリ 内ナデ							
34	壺 完	4.3	3.3	2.4	良好	茶褐色	白色微砂粒多	指整形、指ナデ	手握土器 安定感あり。						
35	壺 完	3.5	1.4	2.9	良好	茶褐色	白色微砂粒多	指整形、指ナデ	非常に雑な作り 安定感なし、手握土器						
36	壺口縁欠	7.0	4.9	3.2	良好	暗～淡褐色	白色微砂粒やや多	外指ナデ 内指ナデ	手握土器 底部に木葉痕あり						
37	壺 完	(8.3)	—	3	良好	茶褐色	白色微砂粒多	外指ナデ 内指ナデ	手握土器						

限に細くしようとした痕跡が認められるものであるが、製作途中に円形を呈していたであろう上部が欠損してしまい放棄されたものと考えられる。27は周溝第4 b層から検出された古墳時代後期初頭頃の高坏である。30は住居跡カマド脇より検出された須恵器蓋であり、いわゆる陶邑編年MT 85併行期に比定されるものであり、付近より31の杯身も検出されている。34～37は手捏ね土器であり、36には底部に木葉痕が認められる。その他1～4は1・2・3・6トレンチより検出された弥生時代の甕・壺・浅鉢の破片である。5は1トレンチ検出の古墳時代前期の甕形土器片である。6は古墳時代後期の坏底部であり、底部に十文字の線刻が認められる。7は茶褐色を呈し、還元炎焼成はされていないが敲きを有し、奈良・平安時代の須恵器であろうと考えられる。これらの遺物は各トレンチ遺構覆土上面からの検出であり、当遺跡に弥生時代～奈良・平安時代における遺構が存在することを暗示しているものと考えられる。

まとめ

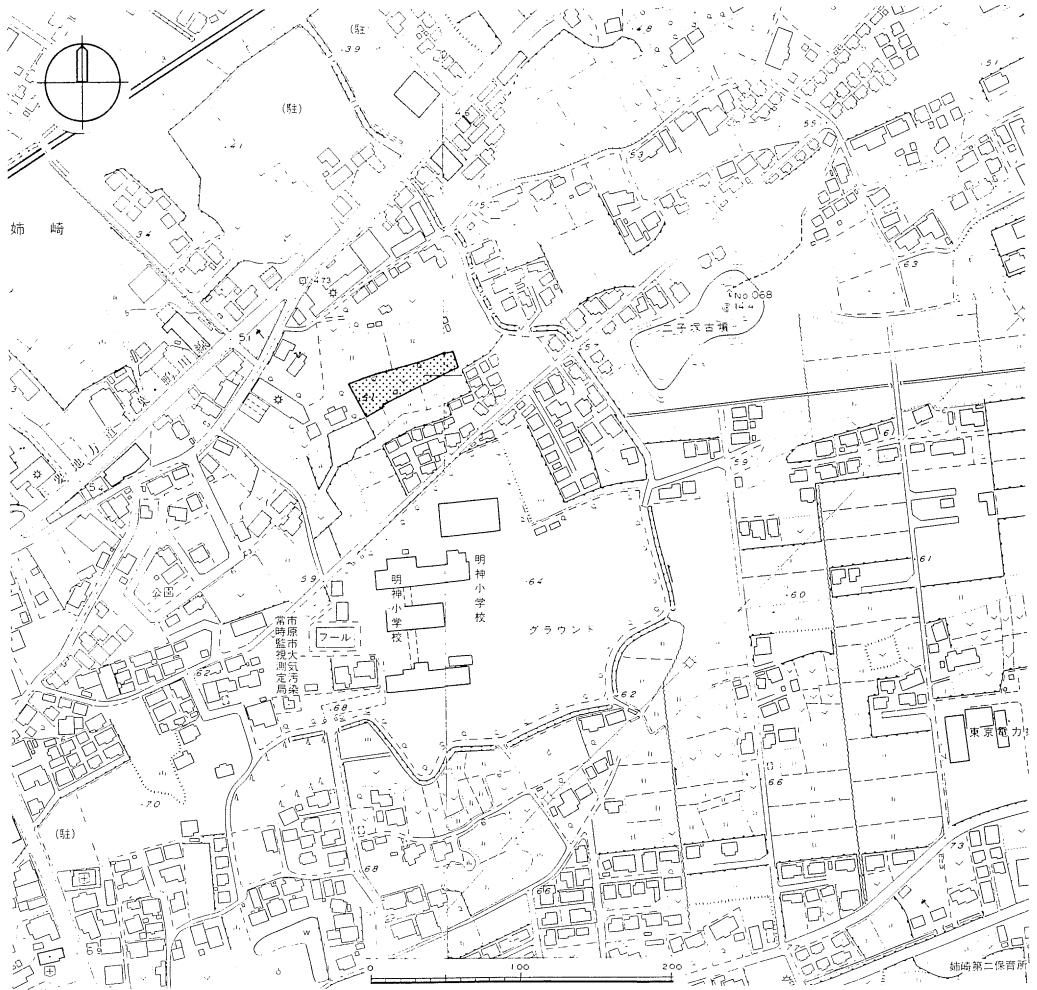
椎津地区の調査はこれまでほとんど行われておらず、今回確認調査とはいえ、この地域における生活様式の一部を垣間見ることができたことは大きな成果と思われる。ただし今回は遺構覆土を一部しか掘り下げていない為、遺構の帰属する時期等については必ずしも明瞭ではない。この問題に対しては引き続き本調査を実施する予定であり、新たな資料が得られることによつて、その全貌がより明瞭にされるであろう。

また第6図における遺構配置図に関しては、遺跡全面に渡る表土除去を行っておらず、また覆土を掘り下げていない為、本調査実施の折には、検出遺構数及びプランが変更する可能性が極めて強いものと申し加えておく。

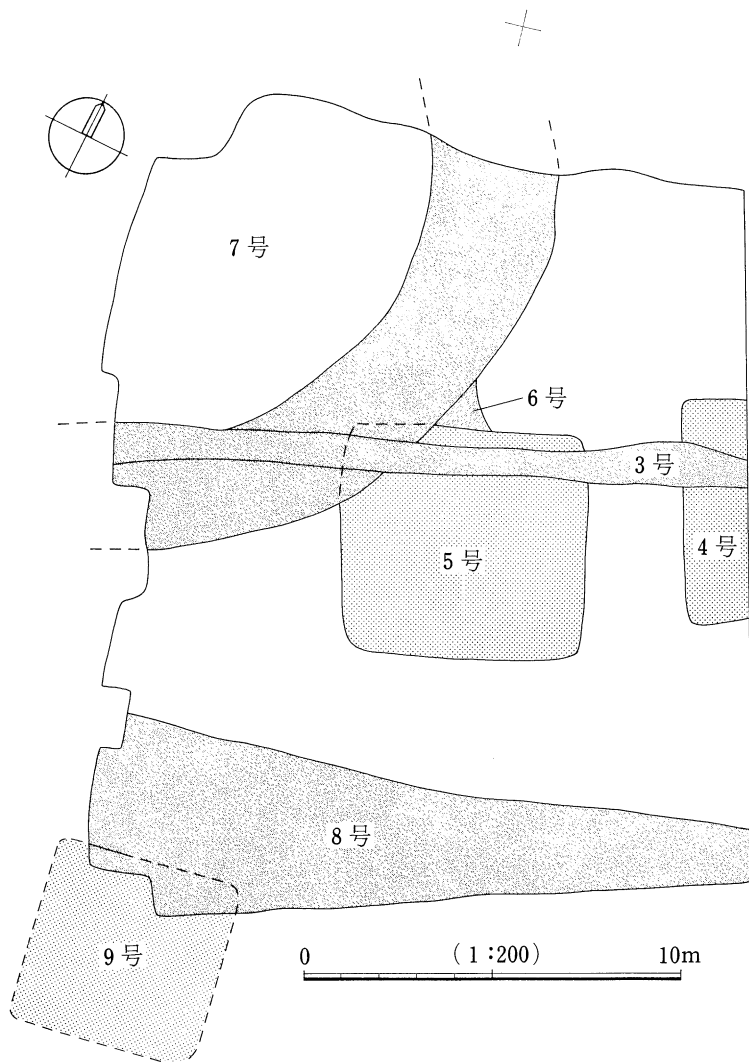
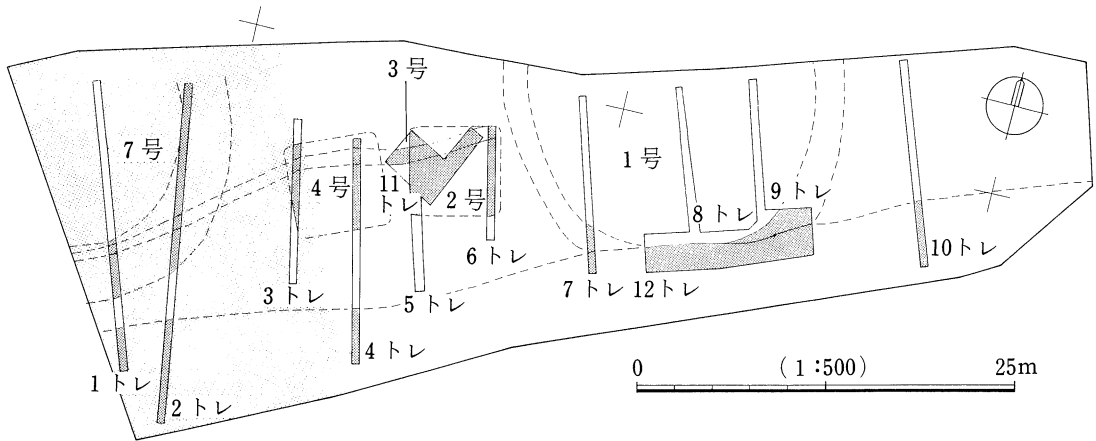
第4章 姉崎上野合遺跡

概要 姉崎上野合遺跡は、標高およそ5m、県下でも有数の大型前方後円墳を有する姉崎古墳群の中でも底地に存在する全長およそ110m、群中第3位の規模を誇る姉崎二子塚古墳の西約100mの地点に位置する。1912年の内房線開通工事に伴い付近の古墳の盛土が次々と消滅していったと聞かすが、今回の調査においても古墳2基が検出され、これらの事実を裏付けることになった。

遺跡は縄文時代後～晩期における海退現象を境として陸地化した浜丘上に位置する為、基本層序がすべて砂によって構成されており、当初遺構確認は困難な作業かと考えられたが、遺構覆土はすべて有機質泥砂によって覆われており、比較的遺構確認は容易であった。



第9図 姉崎上野合遺跡調査範囲と周辺地形図



第3表 上野台遺跡新旧番号一覧表

報告書番号	調査時番号	報告書番号	調査時番号
1号遺構	←	6号遺構	←
2号遺構	←	7号遺構	←
3号遺構	←	8号遺構	←
4号遺構	←	9号遺構	←
5号遺構	←	3号遺構	←

第10図 調査範囲と遺構配置図

調査は初め対象面積1,270㎡のうち10%の127㎡に対して、任意トレンチにおける遺構確認調査を行い、このうち個人宅造に伴う調査区域西側の330㎡に対して本調査を実施した。確認及び本調査で検出された遺構は、古墳2基、住居跡4軒、溝2条、道路状遺構1条である。

尚、遺構番号については整理作業の都合上、一部を第3表のごとく変更している。また遺跡全体図及び遺構配置図における北方位は座標北を示すが、各遺構挿図における北方位は磁北を示している。

遺構と遺物

1号遺構(第10図 図版2・5)

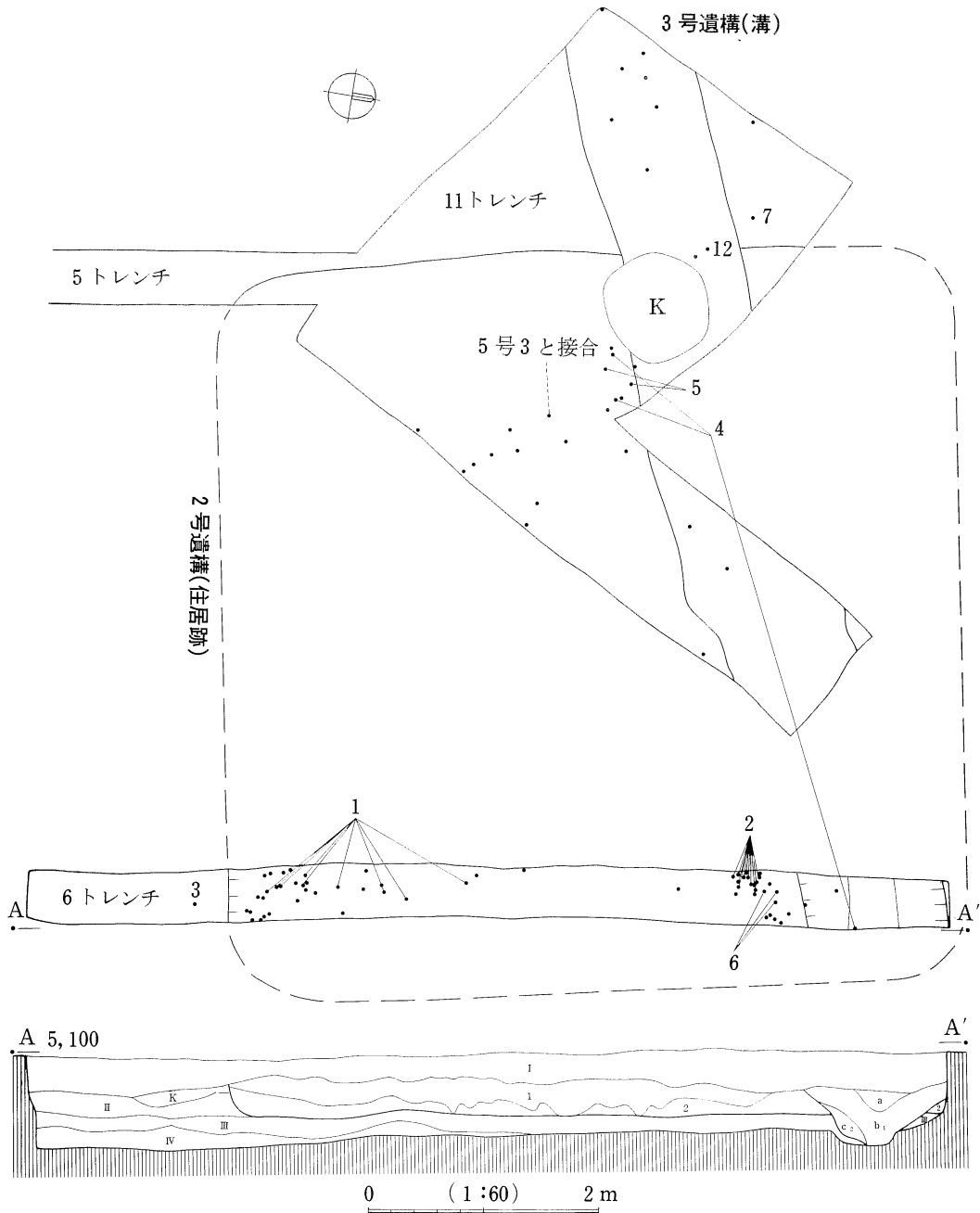
7・12トレンチにそれぞれ孤を描いた状況で検出されている。8号道路状遺構によって大部分は削平されており、また1912年の土取りによってであろうか、すでにマウンドは消滅している。6・10トレンチに検出されていないことから、第10図における破線によって推定される円墳かと考えられる。7～9トレンチにかけて、土師器片、埴輪片が若干検出されているが、覆土を掘り下げていない為、本遺構に直接伴うものかどうかは不明である。(第13図19～21)

2号遺構(第11・12図 図版2・5)

5・6・11トレンチにおいて検出された住居跡である。3号遺構によって一部削平されているが、一辺6.6m前後の規模を持ち方形を呈するものと考えられる。6トレンチの土層断面によれば、確認面からの深さは30cm前後を測り、覆土は自然堆積黒色有機質泥砂によって覆われている。遺物は、この有機質泥砂下面より集中的に検出されており、唯一遺構外検出である3、及び覆土を掘り下げておらず確認面で検出された4・5を除けば、本遺構に直接伴うものであると考えられる。一部の調査の為床面の状況が不明瞭であり、床面の状況を把握すべく断ち割り調査を実施したところ床面は硬化しておらずこの黒色有機質泥砂以下は、プライマリーな状況を呈すると考えられる砂鉄分を多く含んだ青灰色粗砂層であることから、遺物は床面に密着の状況で検出されているものと判断した。この他柱穴、炉跡等については、遺構全域にわたる調査を施行しておらず不明である。

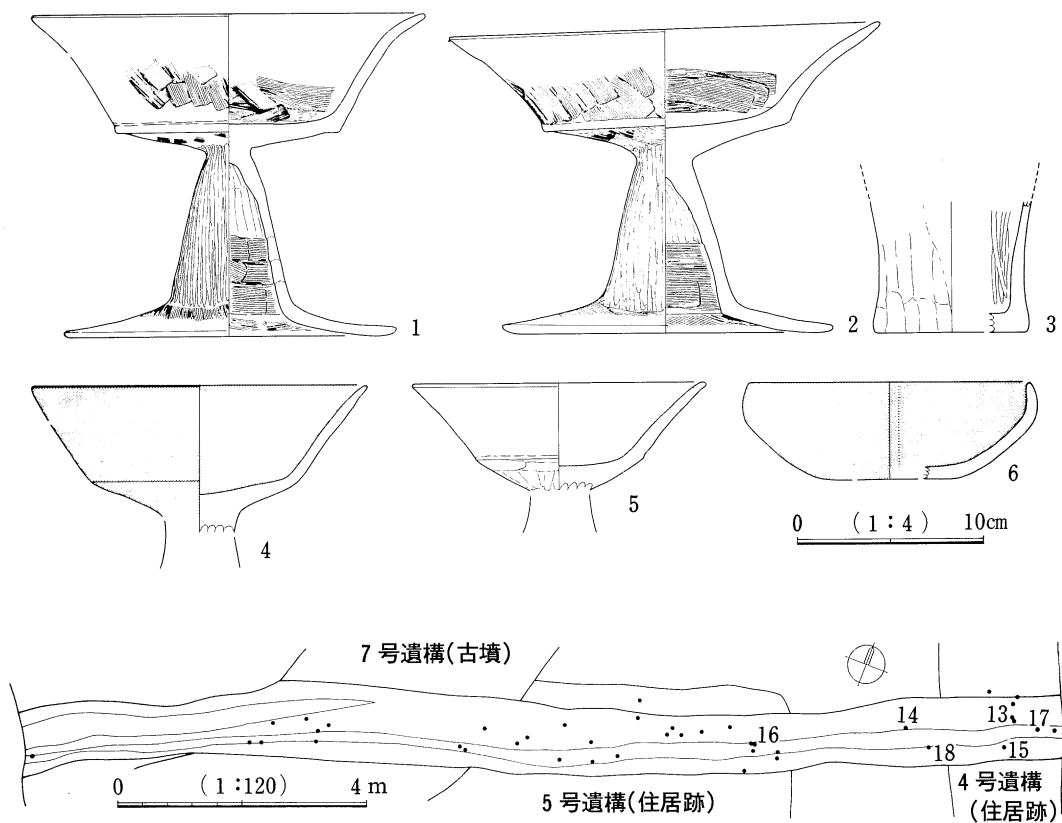
3号遺構(第11・12・13図 図版2・4・6)

2号遺構のみならず、本調査範囲内4・5・7号遺構を横断する溝状遺構である。7トレンチ以下に検出をみなかったことから、6トレンチ以東は調査区域外へ延びるものと考えられる。当初、各遺構との新旧関係がわからず、埴輪を検出することから、1号及び6号遺構とあわせて前方後円墳の周溝の一部かと考えられたが、調査の結果7号遺構西端部よりもさらに西に延び、なおかつ各遺構よりもすべて新しいことが判明している。土層断面によれば幅1m前後、深さ60cm前後を測り、全長25m以上を呈している。遺物は土師器片を含むが、大部分は埴輪片であり、この中にいわゆるB種横ハケといわれる一連の埴輪片も含んでいる。第17図7～12は



- | | | | | |
|-----------|-------------------|---------------------|---------------------------------|-------|
| I 暗灰色砂層 | 耕作攪乱表土砂層 | 2 黒褐色 | 有機質性の最も強い泥砂層、遺物を多量に含む。 | } 3号溝 |
| II 黄褐色砂層 | 締りなし粒子粗 | a 極暗褐色 | やや粒子の粗い、有機質性の強い泥砂。 | |
| III 茶褐色砂層 | 酸化鉄分多く含み、粒子細かく締る。 | b ₁ 極暗褐色 | a層より粒子細かく、有機質性はさらに増す泥砂。 | |
| IV 青灰色砂層 | 鉄分多く含む、粒子粗。 | c ₂ 茶褐色 | 地山崩壊土の黄褐色砂層に、やや粒子の粗い有機質泥砂を混じえる。 | |
| 1 黒褐色 | 有機質性の強い泥砂、乾くと締る。 | | | |

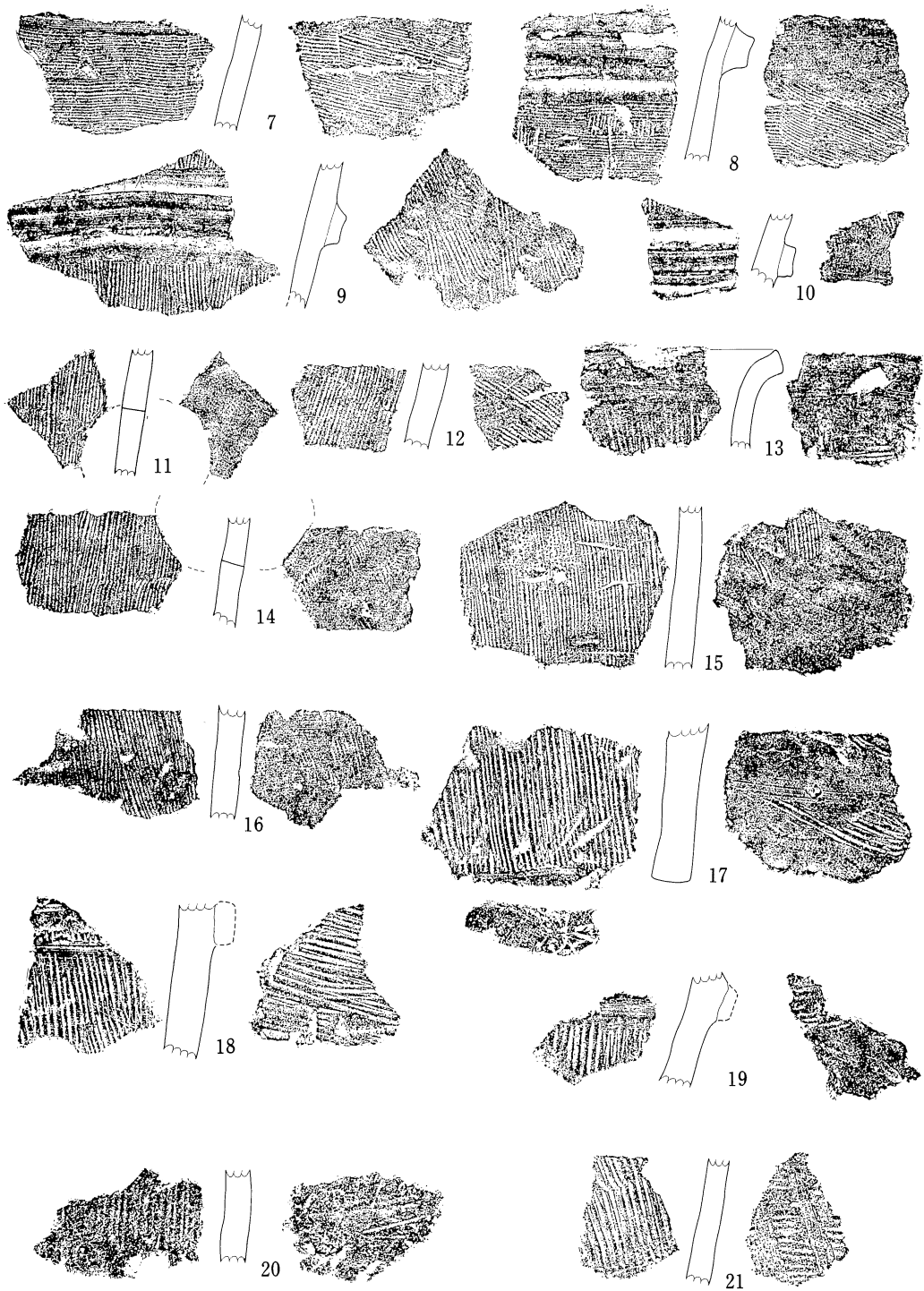
第11図 2号・3号遺構実測図



第12図 2号遺構出土遺物及び3号遺構実測図

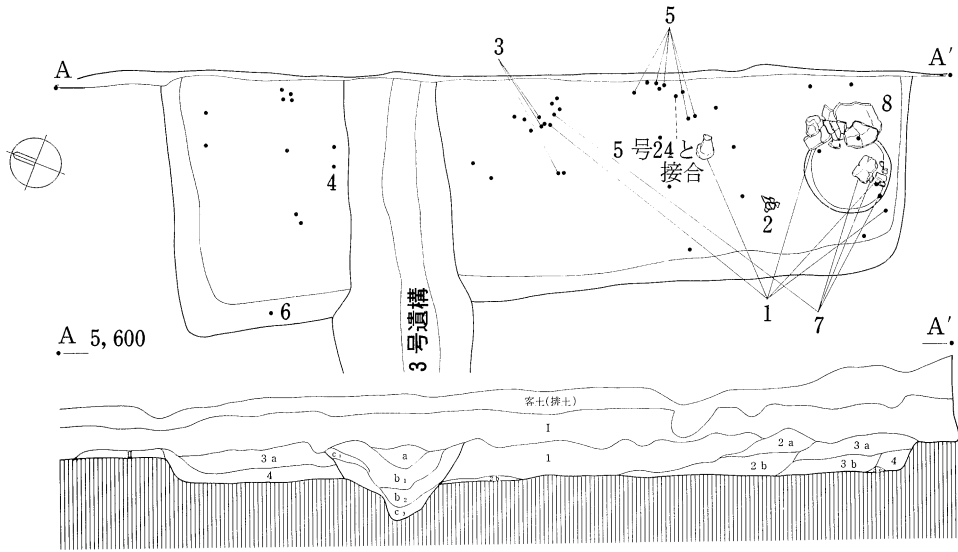
第4表 2号遺構出土遺物観察表

図番	器種 遺存度	法量(推定) cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
1	高坏 1/3強	(21.2)	(17.9)	(17.2)	良好	淡褐色	密	外坏部、体部ハケ、残口唇及び下端はナデ、脚部ミガキ、裾ハケ後ナデ内ヘラ状工具によるカキトリ、中位より下輪積痕をハケ調整により消すも残る。裾中位までハケ、以下横ナデ坏部上端ナデ、下端～底部ハケ調整	胎土は、茶褐色小石(3~4mm大)数点含む
2	高坏 3/4強	16.5	17.7	23.4	良好	淡褐色	密	外口縁横ナデ、体部ハケ、ナデ、脚部ミガキ、裾部ハケ、ナデ内口横ナデ、ハケ目	坏部下端に稜をもつ。丁寧にしあげる。
3	コップ型土器	-	(8.0)	-	良好	茶～暗褐色	密	外ヘラケズリ後、若干ナデ内細い単位のヘラナデ	底部の1/4弱残
4	高坏 坏部 1/2	(18.0)	-	-	良好	茶褐色	密	外口縁横ナデ、体部ヘラナデ内ナデ	坏部下端に弱い稜をもつ。口辺はハの字外反(赤彩)
5	高坏 坏部 1/4	(15.9)	-	-	良好	淡褐色	密	外口縁ヘラナデ、体部ヘラケズリ内ナデ	坏部下端に明瞭な稜
6	坏 1/8	(15.0)	-	5.2	良好	茶褐色	密	外口横ナデ、底部ヘラケズリ内口横ナデ、ミガキ	平底の坏と考えられる。(赤彩)

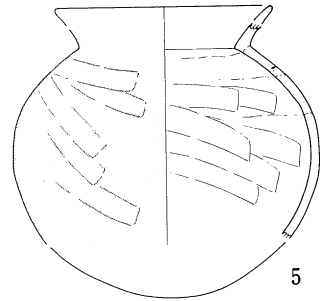
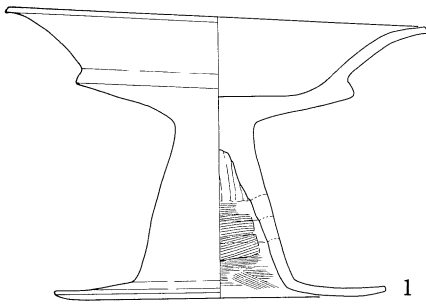


0 (1:3) 10cm

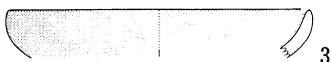
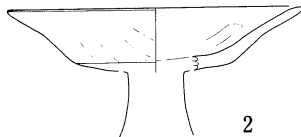
第13図 3号遺構及び5・8・11トレンチ出土遺物実測図



- | | | |
|---|---|------------|
| <p>0 (1:60) 2m</p> <p>1 黒褐色 有機質性の強い泥砂、乾くと締る。</p> <p>2 a 暗褐色 有機質性のやや強い泥砂。</p> <p>2 b 暗褐色 やや有機質性弱い砂層。</p> <p>3 a 茶褐色 酸化鉄分の多い砂層。</p> <p>3 b 茶褐色 酸化鉄分をやや多く含む砂層。</p> <p>3 c 茶褐色 酸化鉄分をやや多く含み、4層の影響を受ける砂層。</p> <p>4 黄褐色 砂鉄を多く含む地山崩壊砂層。</p> | <p>I 暗灰色砂層 耕作攪乱表土砂層締りなし。砂層締りなく(粒子粗)</p> <p>II 黄褐色 やや粒子の粗い、有機質性の強い泥砂。</p> <p>b₁ 極暗褐色 a層より粒子細かく有機質性はさらに増す泥砂。最も有機質性の強い泥砂、粘性強くべつつく。</p> <p>b₂ 黒褐色 地山崩壊土の黄褐色砂にやや粒子の粗い有機質泥砂を混じえる。</p> <p>c₁ 茶褐色 地山崩壊土の黄褐色土に、酸化砂鉄及び粒子の粗い有機質泥砂を混じえる。</p> | <p>3号溝</p> |
|---|---|------------|

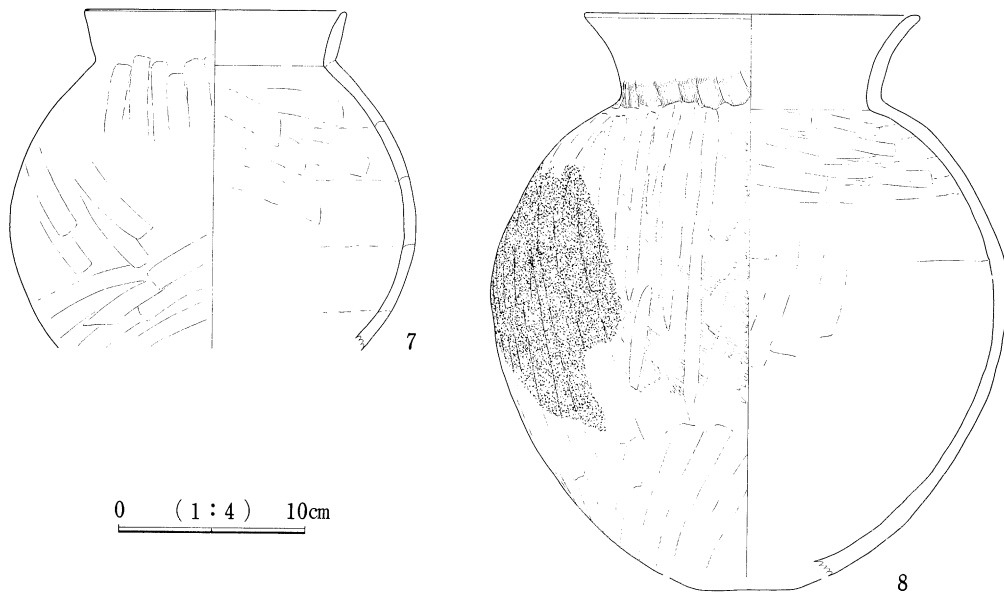


0 (1:4) 10cm



0 (1:3) 10cm

第14図 4号遺構及び出土遺物実測図1



第15図 4号遺構出土遺物実測図2

第5表 4号遺構出土遺物観察表

図番	器種 遺存度	法量(推定) cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
1	高坏 3/4	22.5	17.8	15.6	良好	茶褐色	密	外ヘラケズリ後、全面ナデ 脚内面にハケ目残る。	全体的に丁寧にシャープ
2	高坏 1/6	(15.9)	—	—	良好	内外淡 褐色	密	外口縁ナデ、体部ヘラケズリ 内ヘラナデ	
3	坏 1/6	(8.2)	—	—	良好	茶褐色	密	外ナデ 内ナデ	(赤彩)
4	高坏 脚1/4	—	—	—	良好	外茶褐 色内淡 褐色	密	外脚部ヘラケズリ後ナデ	(赤彩)
5	小型甕 1/4弱	(12.7)	—	—	良好	茶褐色 内暗褐 色	密	外口縁横ナデ、胴部ヘラケズリ後、ヘラ ナデ 内ヘラナデ	外面(赤彩)
6	土鍾	—	—	—		褐色			縄文土器口縁利用
7	甕 1/4弱	(14.1)	—	—	良好	明茶褐 色	密	外胴部ヘラケズリ後、ナデ 内ヘラナデ	
8	甕 1/3強 残	(17.7)	—	(31.0)	良好	外黒～ 赤茶褐 色内明 茶褐色	白色微 砂粒少 量含む	外口横ナデ、頸部ハケ目残、胴太い沈線 状のハケ状工具によるケズリか? 後ミガキが施され全体的に不明瞭 内ヘラナデ	外面に煤付着

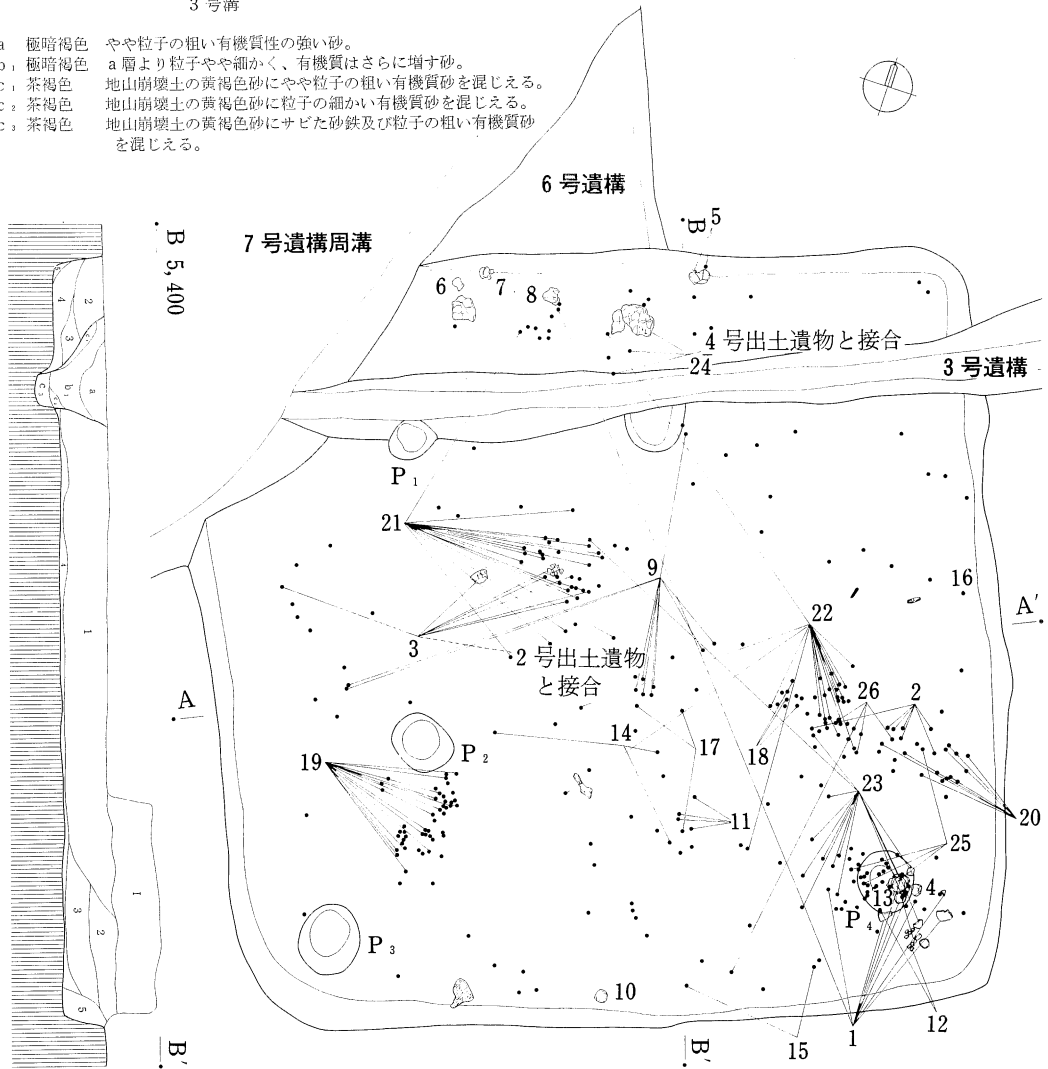
本調査範囲において検出されたものであり、覆土中からの検出である。13～18は2号遺構確認の際、11トレンチ内3号遺構覆土上面からの検出である。また19～21は8・9トレンチ1号遺構からの検出である。

4号遺構(第14・15図 図版4・6)

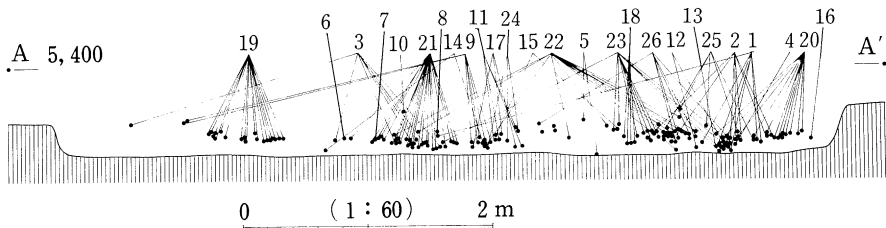
本調査区域内東端より検出された住居跡である。全体の1/3程の検出であり、西壁より判断すれば、一辺6m弱の方形を呈するものと考えられる。深さは確認面より30cm前後を測り、床面

3号溝

- a 極暗褐色 やや粒子の粗い有機質性の強い砂。
- b 極暗褐色 a層より粒子やや細かく、有機質はさらに増す砂。
- c₁ 茶褐色 地山崩壊土の黄褐色砂にやや粒子の粗い有機質砂を混じえる。
- c₂ 茶褐色 地山崩壊土の黄褐色砂に粒子の細かい有機質砂を混じえる。
- c₃ 茶褐色 地山崩壊土の黄褐色砂にサビた砂鉄及び粒子の粗い有機質砂を混じえる。



- | | | | |
|---|-------|-----------------------|---------|
| 1 | 暗灰色砂層 | 耕作攪乱表土砂層締りなし。 | } 5号住居跡 |
| 2 | 黒褐色 | 有機質性の強い泥砂層乾くと締る。 | |
| 3 | 茶褐色 | 酸化鉄分を多く含み、茶褐色を呈する泥砂層。 | |
| 4 | 暗褐色 | 有機質性のやや強い泥砂層。 | |
| 5 | 黄褐色 | 砂鉄を多く含む地山崩壊砂層。 | |



第16図 3号・5号・6号遺構実測図

は硬化しておらず、青灰色粗砂層上である。西南コーナー部分に有機質泥砂を主体とする貯蔵穴と考えられる土壌を検出しており、深さは床面より20cm前後を測る。遺物はこの貯蔵穴周辺に集中し、6を除くすべてが床面密着の状態で検出されており、本遺構に直接伴うものと考えられる。6は縄文土器口縁部再利用の土錘であるが、壁際に検出されており、床面から20cm程度浮いた状態で検出されているため、本遺構に直接伴うものかどうか不明である。

5号遺構(第16・17・18図 図版2・3・6・7)

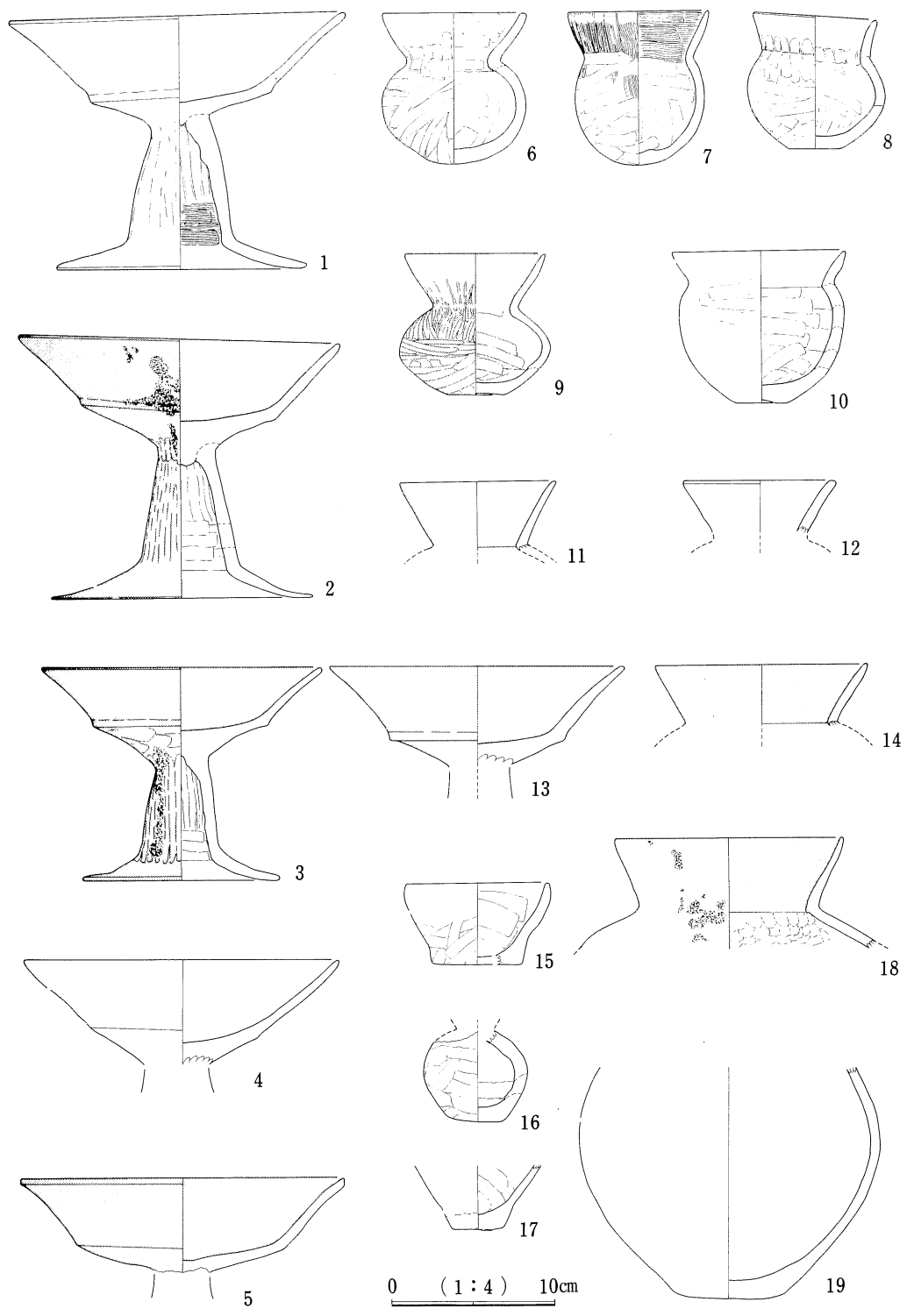
本調査区域内ほぼ中央に検出された住居跡である。確認調査の2・3トレンチの中央部に位置し、本調査によって新たに確認された遺構である。2号・7号遺構によって切られ、また6号遺構を切って存在しており、一辺およそ6m前後の規模を持ち方形を呈するものと考えられる。深さは確認面より40cm前後を測り、床面は硬化しておらず、青灰色粗砂層上面及び青灰色粗砂層の鉄分が酸化したと考えられる茶褐色粗砂層の上面である。いわゆる炉跡と考えられる位置に黒褐色有機質泥砂が集中的に検出されており、深さは床面より10cm前後、床面はほぼ平坦な土壌が検出されている。長軸残存径は35cm、短軸残存径は45cm前後を測り、焼土は認められないものの、若干の炭化物が検出されることから炉址であろうと考えられる。この他計4本のPitが床面上に検出され、いずれも黒褐色有機質泥砂を伴っている。P1及びP4は、主柱穴であろうと思われる。深さは床面よりそれぞれ25・10cmまでが測定可能であった。(湧水により地山砂層が填出する為、正確な底面の確認及び測定は不可能であった。)P2は、黒褐色有機質泥砂が認められたものの、柱穴とするには位置的に問題があるものと考えられる。深さは10cmまでが測定可能であった。P3は、長軸50cm、深さ15cmを測り、4号遺構例から考えて貯蔵穴かと思われる。遺物は床面より10cm程浮いた状態ですこぶる多量に検出されている。6・7・8は7号遺構3・2・4とそれぞれ類似しており、また7号遺構と接合する遺物もあることから、或いは両者間にはそれほどの時期差が存在しなかったのではないかと考えられる。

第6表 5号遺構出土遺物観察表

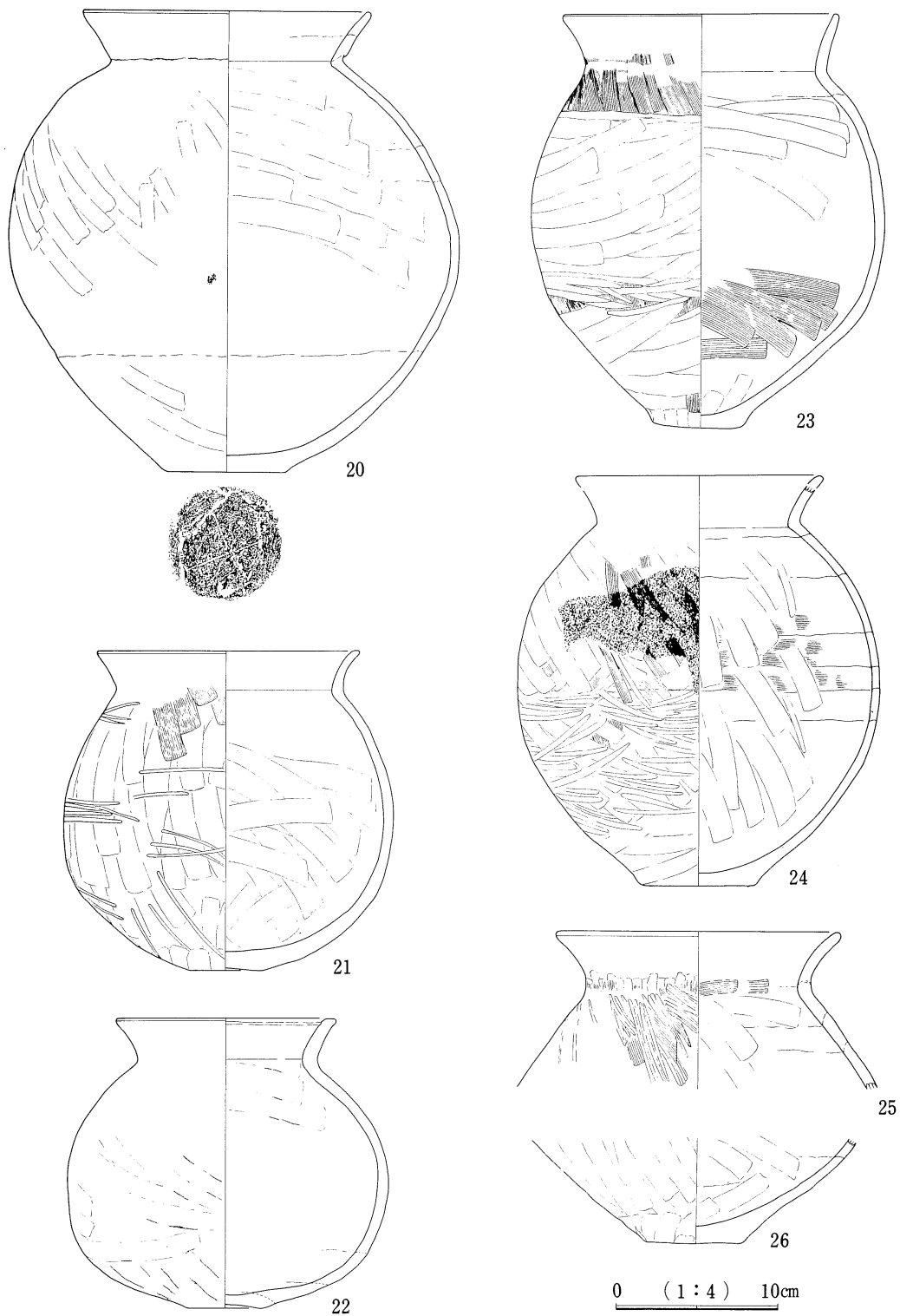
No.1

図番	器種 遺存度	法量(推定)cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
1	高坏 ほぼ完	20.8	15.4	15.4	良好	暗褐色	密	外ヘラケズリ後、横ナデ 内剥離激しい。	脚の一部欠く
2	高坏 (裾 2/3 欠)	19.7	(16.1)	15.8	良好	茶褐色	密	外口縁横ナデ、脚部ヘラケズリ後ナデ 内口縁横ナデ、脚カキトリ後ヘラナデ 裾横ナデ	外面に煤付着 (赤彩)
3	高坏 ほぼ完	17.2	12	13	良好	茶褐色	密	外口縁横ナデ、脚部ヘラケズリ、裾ナデ 内坏部全面ナデ、脚部カキトリ後、ヘラ ナデ、裾横位ナデ	(赤彩)
4	高坏 坏部 2/3	(19.3)	—	—	良好	茶褐～ 淡褐色	微砂粒 小石若 干含む	外ナデ 内ナデ	坏部下端に稜(あまり明 瞭でない)あり。

図番	器種 遺存度	法量(推定) cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
5	高坏 脚部欠	20.0	—	—	良好	茶褐色	密	外口縁横ナデ、体部ヘラケズリ後、ミガキ内ヘラナデ	(赤彩)口唇部に面取(脚部全て欠く)
6	埴 ほぼ完	8.8	—	9.1	良好	暗褐色	白色微砂粒多含む	外口縁横ナデ、胴部ヘラケズリ内ヘラナデ	小石(7mm大)を多く含み精選されていない。
7	埴 口辺 1/2欠	8.6	—	9.2	良好	淡暗褐色	密	外口縁ハケ、胴部ヘラケズリ内口縁ハケ、胴部ヘラナデ	内面底部付近はカキトリに近い。
8	埴 ほぼ完	7.6	3.2	8.3	良好	茶褐色	白色微砂粒多含む	外口縁横位ナデ、胴部ヘラケズリの後若干のナデ 内口縁横位ナデ、胴部ヘラナデ	内外面頸部付近に指圧痕が残る。(内面はその後のナデに依って、くぼみが残る程度)
9	埴 口辺 1/3欠	8.6	3.5	8.6	良好	茶褐色	茶褐色砂少量含む	外口縁横位ナデ、中位～頸部ヘラミガキ、下端～底部ヘラケズリ 内口縁横位ナデ、胴部ヘラナデ	(赤彩)
10	小壺? 口辺の 1/3欠	(10.6)	3.2	9.3	良好	暗～茶褐色	微砂粒多含む	外口縁横位ナデ、胴部ヘラケズリ剥離激しい。 内輪積痕に残る。輪積痕の部分にヘラナデを施すが、全体的に雑	胎土は2～3mm大の小石を多く含む。(精選されていない)
11	埴 口辺の 2/3	9.6	—	—	良好	茶褐色	密	外口縁丁寧なナデ 内ナデ	(赤彩) 器厚薄い
12	埴 口辺 1/2弱	(9.4)	—	—	良好	暗褐色	微砂粒小石多く含む	外横ナデ 内ナデ	
13	高坏 脚部欠	18.1	—	—	良好	茶褐色	密 微砂粒若干含む	外口縁ナデ、坏部下端に稜内やや剥離あり、ナデ後若干のミガキ	(赤彩)内外面
14	埴 口辺の 1/3	(13.0)	—	—	やや不良	茶褐色	微砂粒含む	外口縁ナデ 内ナデ 内外面剥離激しい。	(赤彩) 赤彩は痕跡を残すのみ。
15	鉢 1/3	(8.9)	(5.5)	5	良好	淡褐色	微砂粒含む	外口縁ナデ、底部ヘラケズリ内ヘラナデ	ミニチュア土器
16	小壺? 口辺欠	—	2.3	—	良好	暗～淡褐色	微砂粒含む	外リング皮むき状の粗いケズリ内明瞭な輪積痕	ミニチュア土器
17	鉢 1/2	—	3.2	—	良好	暗～淡褐色	密	外底部ケズリ 内ナデ	ミニチュア土器(内面黒褐色)底部にケズリ残しの粘土Bが付着したまま焼成
18	壺 1/4弱	(14.0)	—	—	良好	茶褐色	密	外ナデ 内口縁ナデ、胴部指による調整	(赤彩) 外煤付着
19	壺 胴～底 の1/2	—	5.2	—	良好	外暗褐色、内淡暗褐色	微砂粒小石多く含む	内外面とも器面の剥離激しい。	
20	壺 ほぼ完	17.5	7.0	28.5	良好	暗褐色	密	外口縁横位ナデ、胴部ヘラケズリ後ヘラナデ、頸部ナデ残しによる段差あり 内ヘラナデ	胎土は、3～8mm大の小石及び微砂粒含む 底部十文字の線刻
21	壺 1/4欠	16.2	4.5	19.6	良好	暗褐色	密	外口縁横位のナデ、胴部ヘラケズリ後沈線状のミガキ 内ヘラナデ	底部に安定感なく物をつめないとしたない。
22	壺 5/6	13.5	4.7	17.7	良好	暗～淡褐色	白色微砂粒多量に含む	外口縁横位のナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ 内ヘラナデ	
23	壺 ほぼ完	17.0	5.6	25.4	良好	暗褐色～褐色	密	外口縁横位のナデ、頸部ハケ、胴部ヘラケズリ、ハケ目残 内ヘラナデ、ハケ目残	口縁～胴部の一部欠く。
24	壺 口唇の 一部残	(15.4)	7.0	(25.2)	良好	暗茶褐色	密	外口縁横位ナデ、胴部ハケ目後ヘラナデ後、若干粗いミガキナデ残しの部分に残る。 内ハケ後ヘラナデ、ヘラナデのしっかりされていない所にハケ目残る。	内面輪積痕明瞭 外面に煤付着
25	壺 口辺～ 胴1/3 残	17.4	—	—	良好	淡茶褐色	密	外口縁ハケ後、ヘラミガキ 内ハケ後ヘラナデ	
26	壺 底部の み	—	5.8	—	良好	内外面極暗褐色	微砂粒多量に含む	外胴部ヘラケズリ 内ヘラナデ	



第17图 5号遺構出土遺物実測図1



第18图 5号遺構出土遺物実測図2

6号遺構(第16図 図版3)

5号・7号遺構に切られて存在する遺構である。当初1号・3号遺構と共に前方後円墳の前方部周溝かと思われたが、調査の結果図示の様な遺構となった。確認面より深さは20cm前後を測り、床面はほぼ平坦である。Pit等は検出されず、壁は急激に立ち上っている。覆土・掘り方とも当遺跡における住居跡例に近似するが、7号遺構周溝内面に対応するプランが検出されなかったことから、とりあえず小規模な竪穴状遺構として報告しておく。また遺構内からは遺物がまったく検出されなかったが、付近よりa～cの安行Ⅱ式期に比定される遺物が検出されており(第22図)、或いは当期に比定される遺構かと考えられる。

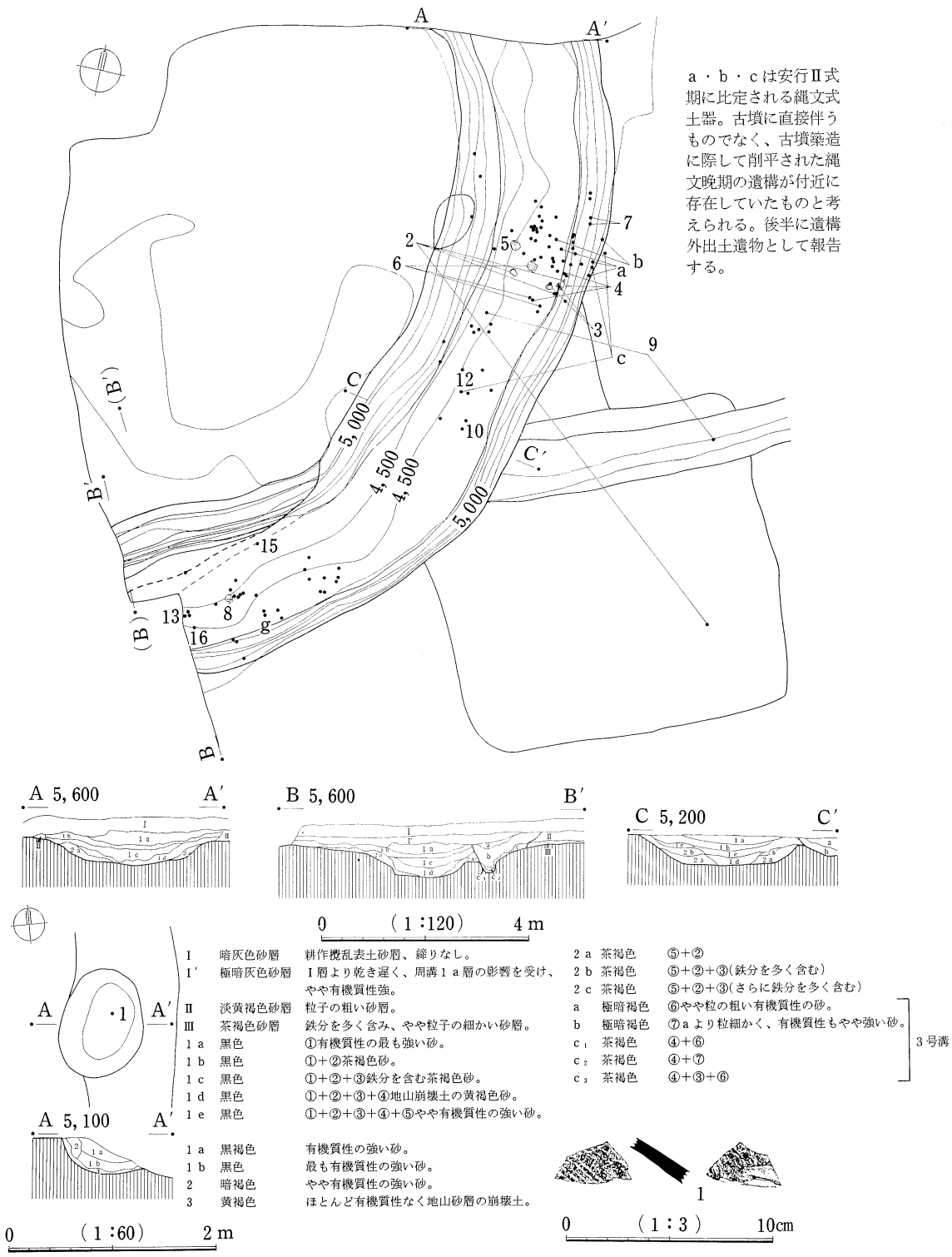
7号遺構(第19・20図 図版2・3・8)

本調査区域西部において全体の1/4程検出された円墳である。墳丘はすでに削平されており、周溝のみの検出である。周溝は上端3m、下端1.2～1.9m前後の幅で巡り、深さは確認面より60cm前後を測る。断面は緩やかな逆梯形を呈しており、覆土は自然堆積の状況を示している。

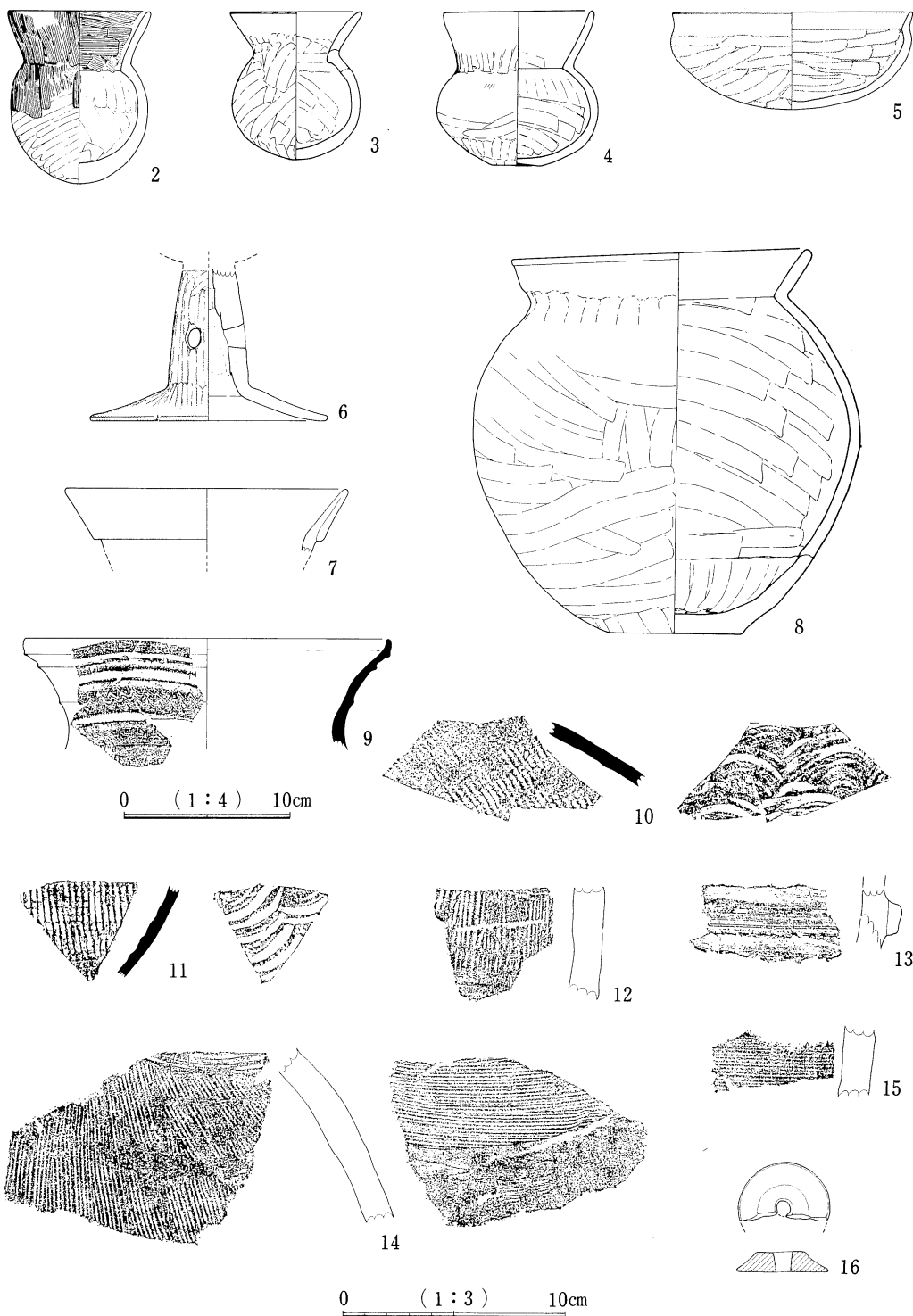
遺物は2～8が周溝下端側面及び底部に密着した状況で検出されており、本遺構に直接伴うものと考えられる。また2～6は一地点に集中して分布しており、このうち5号住居跡出土埴型土器7と近似ぶりを示す2の埴型土器は、本体を古墳周溝内に、口縁部小破片1点を5号住居跡覆土中に検出しており接合関係を有するものである。また東側周溝内に土壌が検出されており、底面より約15cm程浮いた状況で1の須恵器片が検出されている。また接合には至らなかったが、付近より10数点の須恵器片が覆土上層中から検出されており、このうち9は3号遺構覆土内検出須恵器片と接合関係を有している。12～15は埴輪片であり、14は朝顔型埴輪と考え

第7表 7号遺構出土遺物観察表

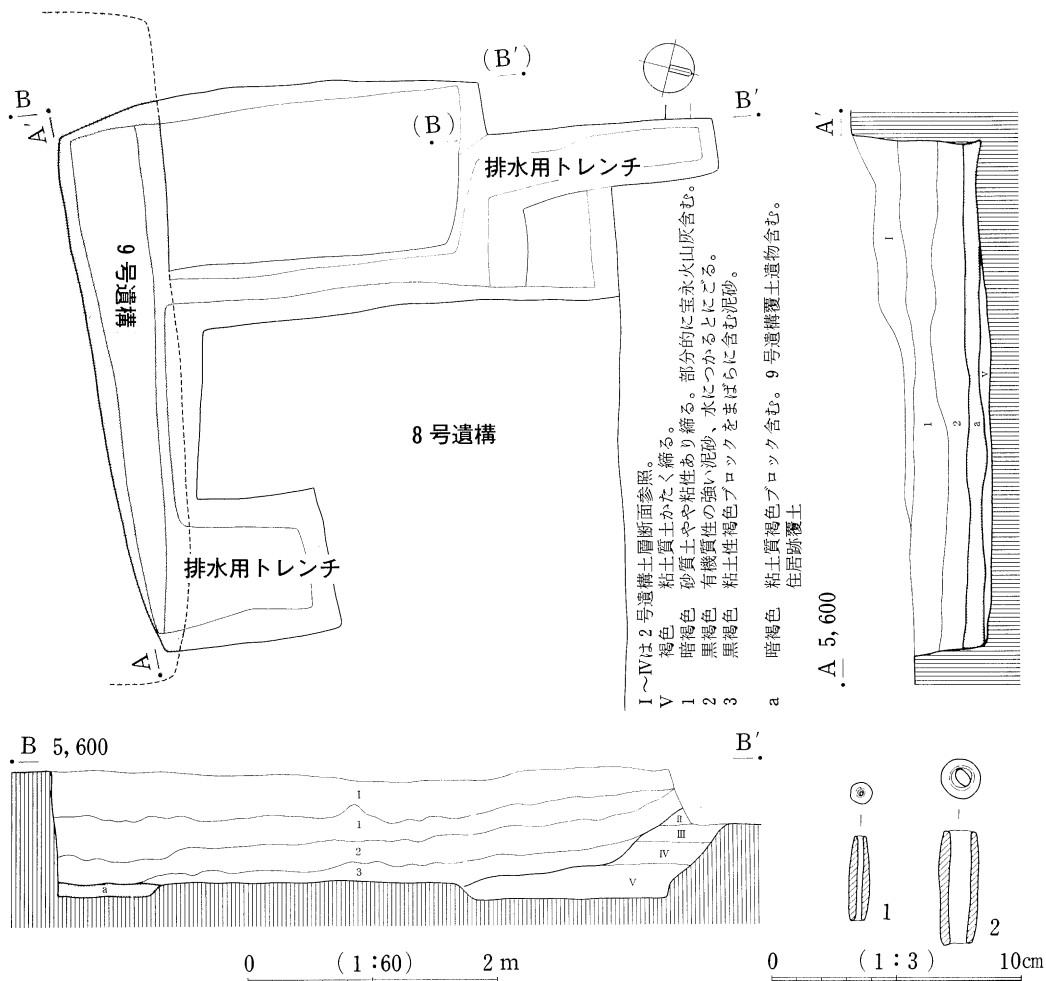
図番	器種 遺存度	法量(推定)cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
2	埴 ほぼ完	8.5	—	10.2	良好	淡暗褐色～暗褐色	密	外ロハケ胴部上位はハケ後ヘラケズリ、 下位はヘラケズリ後指ナデ 内ロハケ胴部ヘラナデ	ロ辺の一部欠く。 砂の鉄分が(サビ?)附着。 丸底
3	小型埴 ほぼ完	7.8	—	8.7	良好	暗褐色	密	外ロ横ナデ、胴ヘラケズリ 内ロ横ナデ、胴ヘラナデ	(丸底)ロ辺の一部欠く。 丁寧にしあがる。部分的に砂に含まれる鉄サビ附着。
4	埴口辺 1/3欠	9.1	3.0	9.2	良好	淡褐色	微砂粒 小石や や多	外ヘラケズリ後ナデ 内ヘラナデ ロ辺内外横位ナデ	あげ底気味
5	坏 完	14.4	—	5.8	良好	茶褐色	密	外ケズリ後ミガキ 内ナデ後ミガキ	外砂の鉄分が(サビ?)附着している所あり。 (赤彩)
6	高坏 脚1/2 弱	—	(14.2)	—	良好	赤茶褐色	密	外脚部ヘラケズリ、裾ナデ 内ヘラ状工具による粗なカキトリ	(赤彩)脚部に一孔
7	壺口辺 の1/8 弱	(17.2)	—	—	良好	暗褐色	密	外折り返し口縁横ナデ 内ナデ	
8	甕 ほぼ完	17.2	7.7	22.7	良好	茶褐色	微砂粒 多量に 含む	外ヘラケズリ後ナデ、ケズリ痕明瞭でない。 内ヘラナデ、輪積痕あり	ロ辺の一部欠く。
9	須恵器 甕口辺 の1/8 弱	(22.0)	—	—	良好	暗青灰色	密	ロクロ、ロ辺稜間に櫛描波状紋 内面に自然釉	TK 208～ON 46 併行 期の所産か?



第19図 7号遺構及び出土遺物実測図



第20图 7号遺構出土遺物実測図

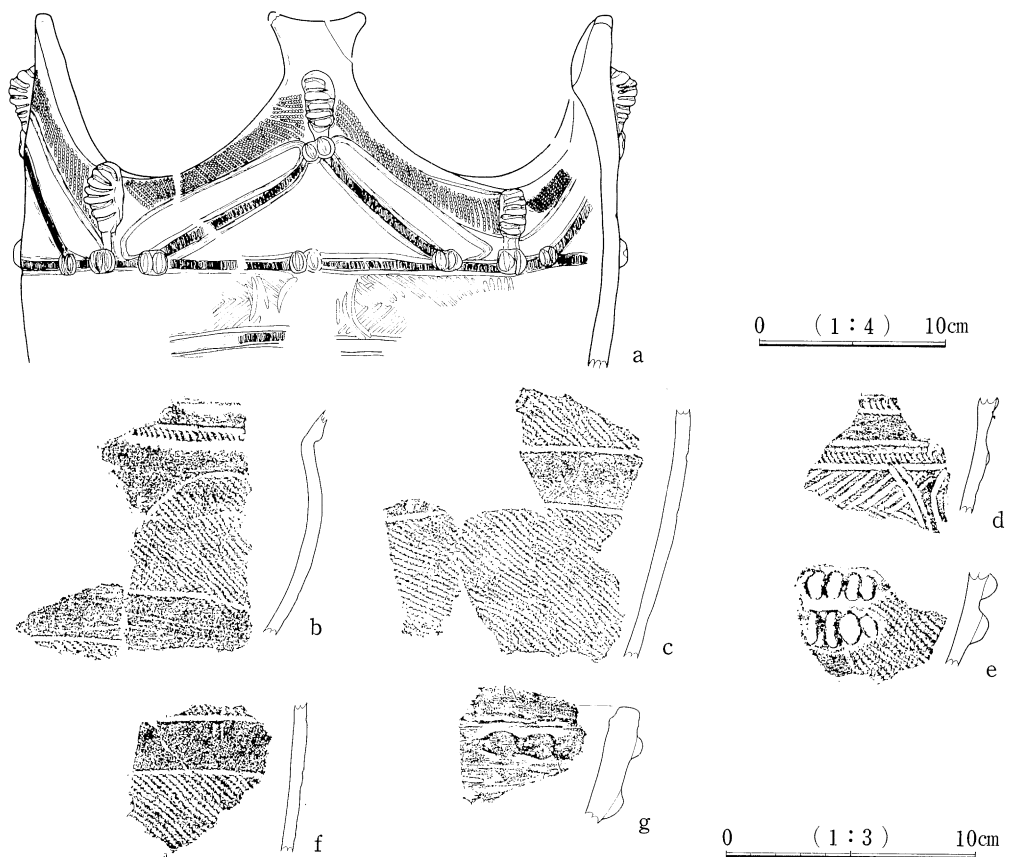


第21図 8号・9号遺構実測図及び9号遺構出土遺物実測図

られるものである。16は紡錘車であり、 $\frac{1}{2}$ 弱が欠損している。また11・14は共に3号遺構交差部付近からの検出であるが、湧水によって土柱が崩壊してしまい一括して取り上げたものである。

8号遺構(第21図 図版4)

確認・本調査区域全域にわたって南側に検出された道路状遺構である。覆土最上層に宝永火山灰を検出する箇所が所々にあり、江戸時代にはすでに道路として使用していたことが窺われる。深さは確認面より50cm前後を測り、底面はほぼ平坦である。上端の一方は調査区域外に存在しており、幅等については不明であるが断面は逆梯形を呈するものと考えられる。遺物は12トレンチ及び今回の調査範囲内より土師器細片を若干検出したにすぎない。



第22図 遺構外出土遺物実測図

9号遺構(第21図 図版4・8)

8号遺構の下層より検出した住居跡である。深さは検出面より20cm弱、覆土の大半は8号遺構によって削平されている。床面はほぼ平坦であり、褐色粘土質土中に掘り込まれている。遺構の大半は調査区域外に存在しているものと考えられ、規模等は不明である。遺物は土師器細片数点と、管状土錘2点の検出である。

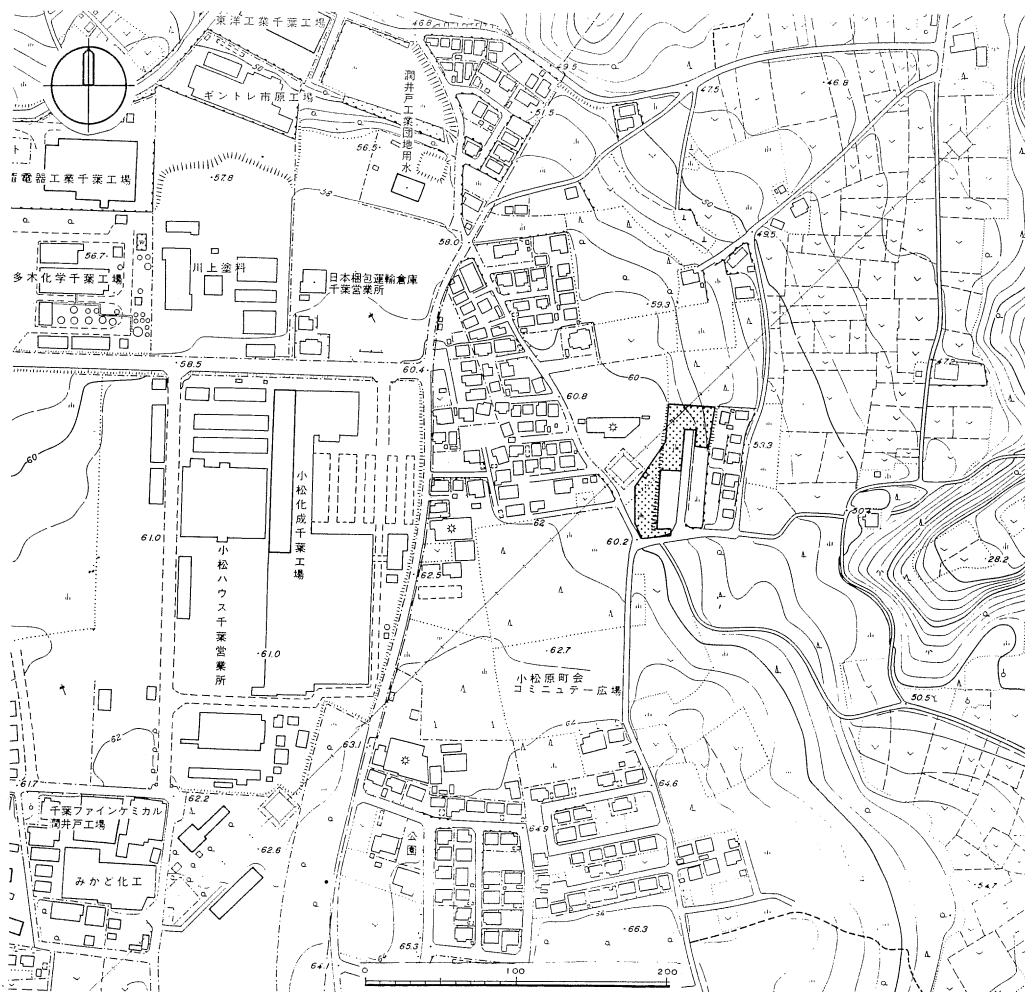
遺構外出土遺物(第22図 図版8)

遺構外より検出した遺物を第22図にまとめた。いずれも7号遺構内及び付近で検出されているものである。a～fは周溝西側上端部付近より検出されているもので、安行Ⅱ式期に比定されるものである。gは周溝覆土内からの検出であり、加曾利B式期の所産かと考えられる。

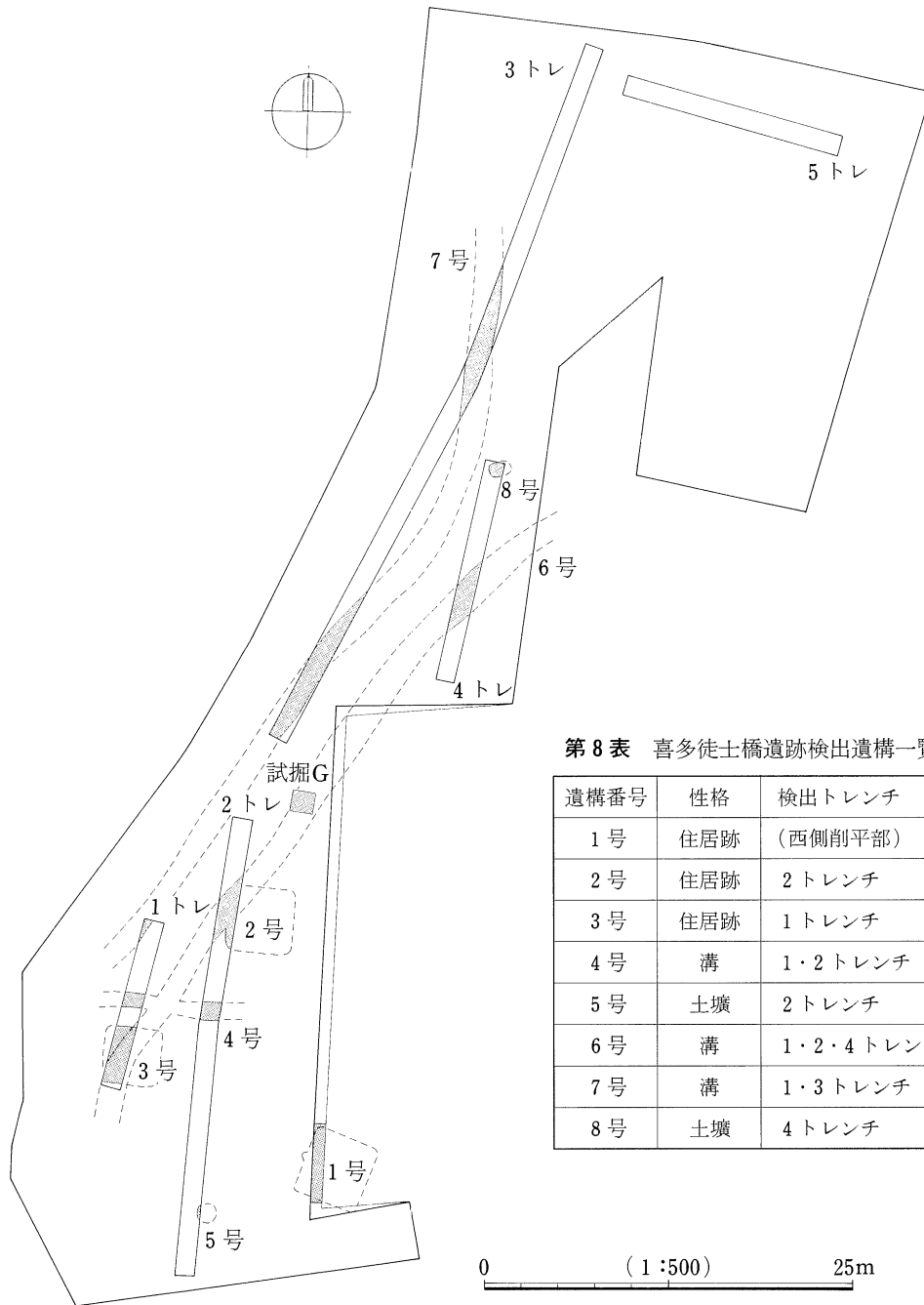
これらの遺物は7号遺構に直接伴うものではなく、すべて遺構外遺物の範疇で捉えられるべきものであり、安行Ⅱ式期にはすでに当遺跡が陸地化していた様相が捉えられようか。

第5章 喜多徒土橋遺跡

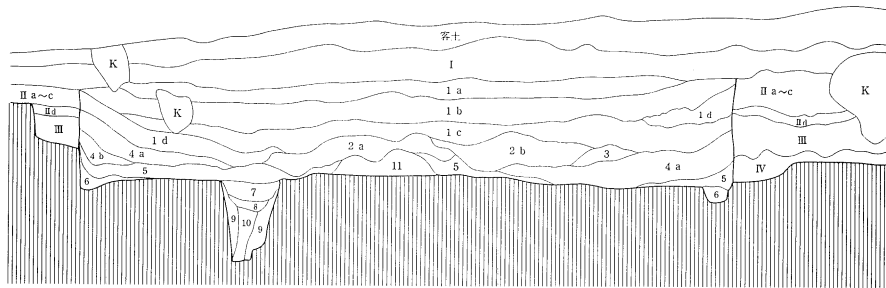
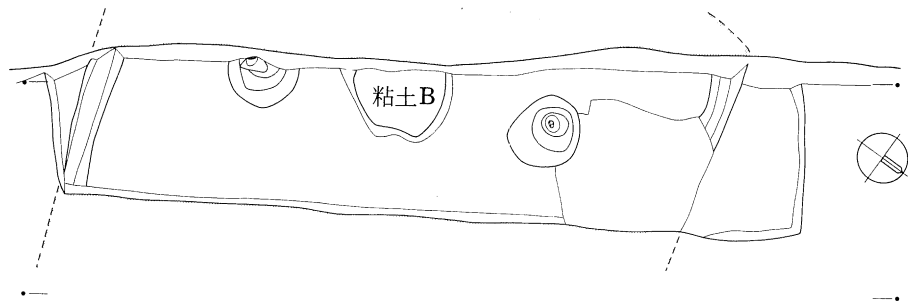
概要 喜多徒土橋遺跡は標高およそ60m、村田川南岸に合流する喜多川の小支谷が形成する台地上に位置している。調査は対象面積1,866㎡の10%にあたる186㎡に対して行われた遺構確認調査であり、調査の結果遺跡北及び西側はソフトローム層以下に達する削平を受け、遺跡の遺存状況は必ずしも良好とは言えないが削平されていなかった東側を中心とする区域内には、住居跡3軒、溝3条、土壌2基が検出されている。このうち1号住居跡及び6号溝については調査区域西側における1m前後に及ぶ削平の為すでに断面として観察される状況であり、両者の断面図作成が急務であると考えられる状況であった。そこで1号及び6号に至る間の断面図を作成し、わずかに削平を免れた1号遺構に対してその状況を把握するため一部を調査した。



第23図 喜多徒土橋遺跡調査範囲と周辺地形図

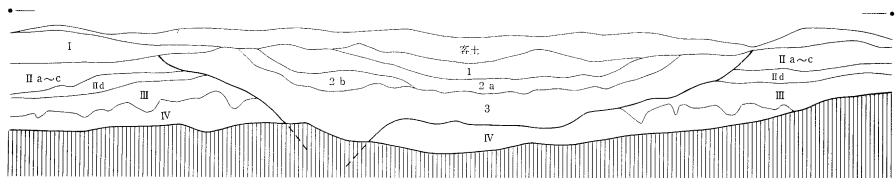


第24図 調査範囲と遺構配置図



1号遺構断面図

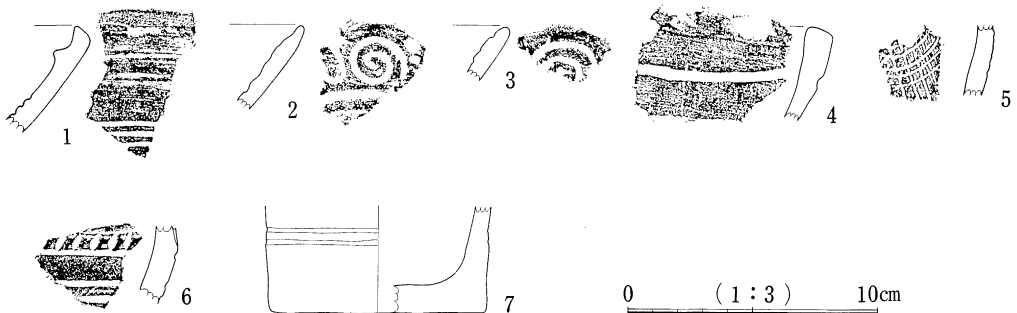
- | | | | | | | | | |
|-----|-----|----------------------|-----|-----|---------------------|----|-----|-----------------|
| 1 a | 黒色 | 有機質土、ローム等をほとんど含まない。 | 3 | 黒褐色 | 有機質土、ローム粒、ロームB若干含む。 | 8 | 暗褐色 | やや有機質性強、締り欠く。 |
| 1 b | 黒色 | 有機質土、a層より黒味強い。 | 4 a | 暗褐色 | ローム粒、ロームBやや多く含む。 | 9 | 暗褐色 | ロームB、ローム粒多量に含む。 |
| 1 c | 黒色 | 有機質土、ローム粒若干含む。 | 4 b | 暗褐色 | a層より有機質性が強い。 | 10 | 黒褐色 | 有機質土、締り欠く。 |
| 1 d | 黒色 | 有機質土、ローム粒少量含む。 | 5 | 暗褐色 | ローム粒、ロームB、山砂若干含む。 | 11 | 黄白色 | 山砂、粘土B、カマド流出粘土。 |
| 2 a | 暗褐色 | ローム粒、焼土粒、山砂、粘土粒少量含む。 | 6 | 褐色 | ローム粒、ロームB多量に含み締り弱。 | | | |
| 2 b | 暗褐色 | 山砂、粘土粒a層より多く含み締る。 | 7 | 暗褐色 | ローム粒やや多く含む。 | | | |



6号遺構断面図

- | | | | | |
|--------|-----------|-----|-----|-----------------------|
| I | 表土 | 1 | 黒褐色 | 有機質土、ローム粒少量含む。 |
| II a~c | 自然堆積有機質土層 | 2 a | 青灰色 | 宝永火山灰層 |
| II d | ローム漸移層 | 2 b | 暗褐色 | 宝永火山灰を部分的に含みローム粒若干含む。 |
| III | ソフトローム | 3 | 黒褐色 | 有機質土、ローム粒まばらに含みやや締る。 |
| IV | ハードローム | | | |

0 (1:60) 2 m



第25図 1号・6号遺構実測図及び遺構外出土遺物実測図

以下調査に関する遺構・遺物について概述する。なおトレンチ・遺構番号については調査段階のものをそのまま使用し、挿図方位は磁北を示す。また7号遺構については覆土内に宝永火山灰が検出されていることから、6号遺構と近似する時期に比定される溝であると考えられる。この他の遺構については、覆土を掘り下げていない為遺物検出に恵まれず、明瞭な時期等については言及をさけない。

遺構と遺物

1号遺構(第25図 図版4)

調査区域西南端に検出された住居跡である。すでに大部分は削平されており、基本土層2a層を掘り込んで構築されていることが窺われる。またすでに削平されていた西側部分に粘土が散布している状況が認められ、粘土散布部分を調査してみたところ支柱穴と思われる2本のPitと堅備な床面及び周溝を検出した。また柱穴間に多量に認められる粘土ブロックはおそらくカマドより流出した粘土であろうと考えられる。遺物は残存した覆土が5cm前後であった為極めて少量の土師器細片が床面密着の状況で検出されたにすぎず、具体的な時期判定及び図示が不可能であったが、カマドを保有するものと考えられ、古墳時代後期以降に位置づけられる遺構と考えられる。

6号遺構(第25図 図版4)

1・2・4トレンチ及び調査区域西側において断面で検出された溝である。覆土2層中に10cm以上に達する宝永火山灰が検出されていることから、江戸時代以前の遺構であると考えられる。断面は半円状を呈し、底面の一部がV字状に落ち込む様相が捉えられる。基本土層2a層を掘り込んでおり、覆土は自然堆積の状況を示している。

遺構外出土遺物(第25図 図版8)

遺構外出土遺物を第25図にまとめた。これらの遺物はすべて縄文時代後期加曾利B式期に位置づけられ各トレンチ掘削時に散在的に検出されたものであり、特定の遺構からの検出ではない。

第6章 総 括

最後に平成元年度における市内遺跡群発掘調査において得られた成果のうちでも、本調査を実施した姉崎上野台遺跡についてまとめておきたい。検出された遺構は円墳2基、住居跡5軒、道路状遺構1条、溝1条であるが、このうち1基の円墳のおよそ $\frac{1}{4}$ 、住居跡3軒(2軒はそれぞれ $\frac{1}{3}$ 程度)の調査が実施された。

古墳はすでにマウンドは削平されているものの、東側周溝底部付近に本遺構に直接伴うものと考えられる一括資料を得ることができた。時期的には古墳時代中期和泉式期でも後半に属するものと考えられ、古墳の年代は当期に比定されるものと考えられる。

次に調査を実施した住居跡でも5号住居跡からは、極めて大量の遺物が検出され、時期的にも古墳の年代と近似する時期に比定されよう。また他の住居跡等については全面調査に及んでいないものの、検出された遺物から5号遺構と同時期か、あるいは若干古い時期の所産であるものと考えられる。

道路状遺構・溝状遺構はいずれも古墳及び住居跡より新しい時期の遺構であることが判明している。道路状遺構は覆土に宝永火山灰を検出していることから、比較的新しい時期の遺構であろうということが推定される。また溝状遺構は覆土内にいわゆるB種横ハケと呼ばれる一連の円筒埴輪片及び朝顔型埴輪片を含んでいることから、付近にこれらの埴輪を有する古墳の存在が考えられよう。この場合、遺跡東へ約100mの地点に存在する姉崎二子塚古墳の存在が注目され、また同古墳は埴輪を有し、検出された遺物より5世紀中葉の年代感が与えられている大型の前方後円墳でもあることから、3号溝検出埴輪はあるいはこの姉崎二子塚古墳に帰属する遺物である可能性も考えられる。

以上のことをまとめると、姉崎上野台遺跡は古墳時代中期においては、すでにこの様な底地にまで古墳や集落が営まれていた裏付となり、当期の生活を考える上で極めて重要な遺跡であろうと考えられる。



調査前近景



1 トレンチ北側より



2 トレンチ北側より



2 トレンチ・6号遺構

椎津茶ノ木遺跡



調査前近景



1 トレンチ東側より



1 トレンチ西側より



遺跡西側より(左手に稲荷山古墳が存在する)

椎津茶ノ木遺跡



3 トレンチ西側先端部



3 トレンチ東側先端部



7 トレンチ東側より

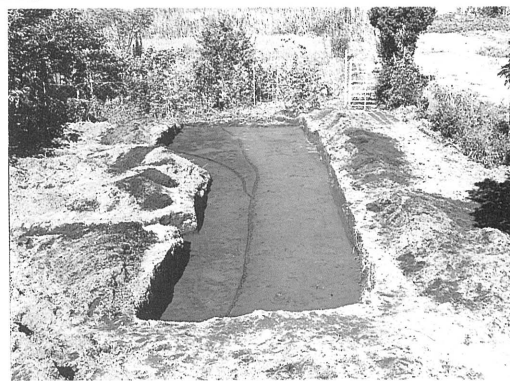


8 トレンチ西側より

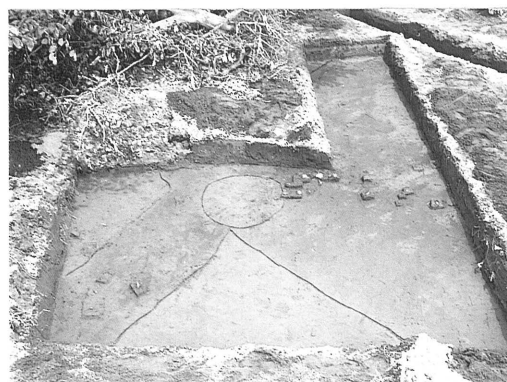
姉崎上野合遺跡



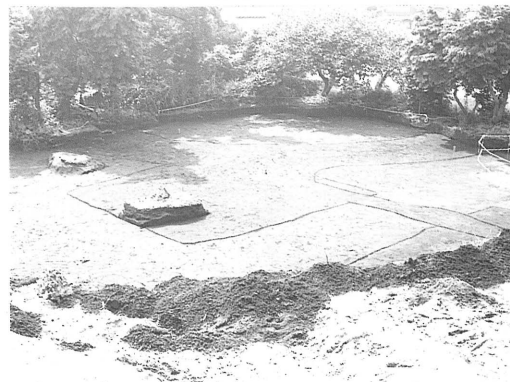
調査前近景



12 トレンチ遺構検出状況



11 トレンチ遺構検出状況



本調査区域近景

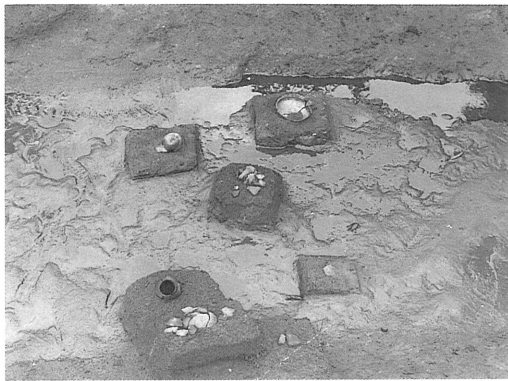
姉崎上野合遺跡



7号遺構全景



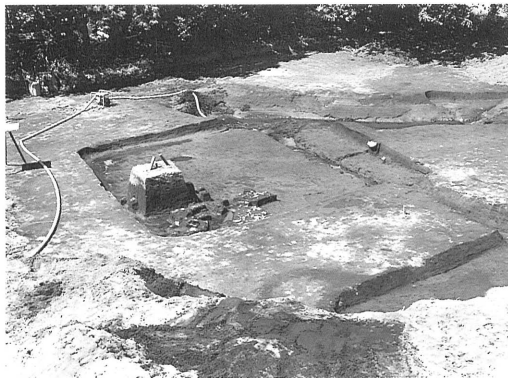
7号遺構完掘状況



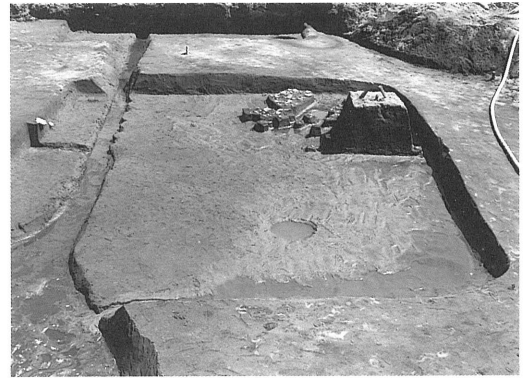
7号遺構遺物出土状況



7号周溝内土壌全景



5号遺構東側より



5号遺構西側より



5号遺構遺物出土状況 1



5号遺構遺物出土状況 2

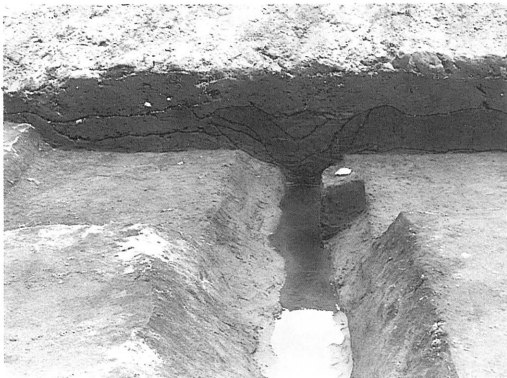
姉崎上野合遺跡



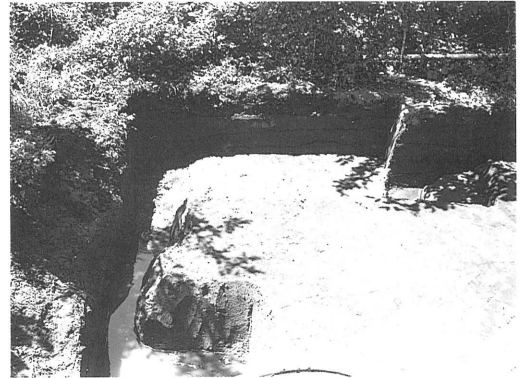
4号遺構検出状況



4号遺構遺物出土状況



3号遺構検出状況

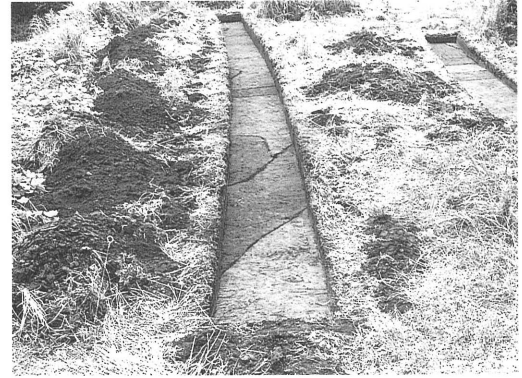


8号・9号遺構調査状況

喜多徒士橋遺跡



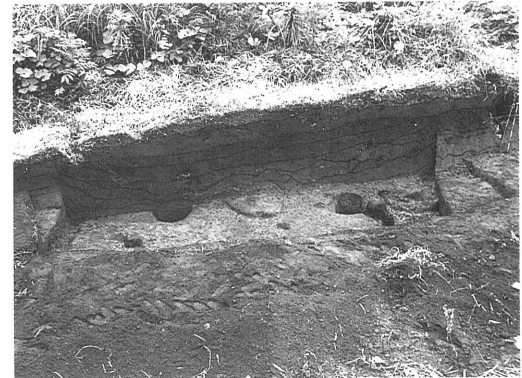
1 トレンチ遺構検出状況



2 トレンチ遺構検出状況



3 トレンチ・4 トレンチ遺構検出状況



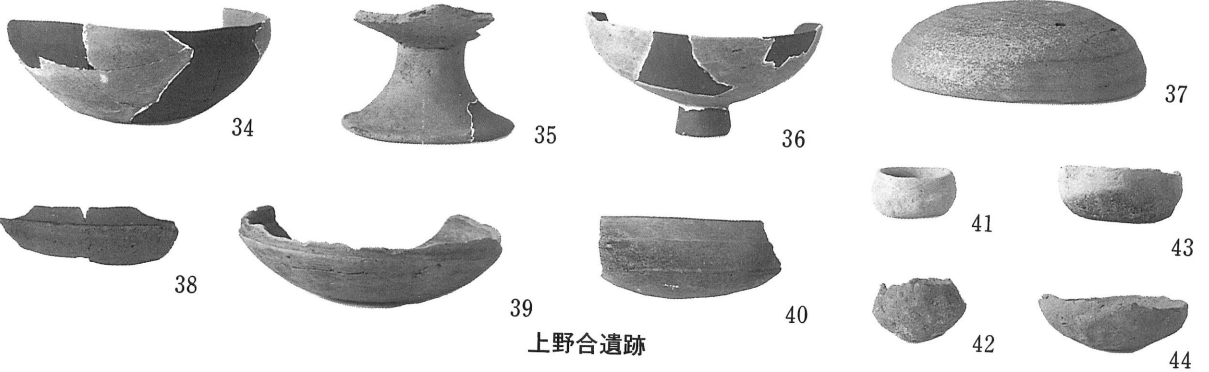
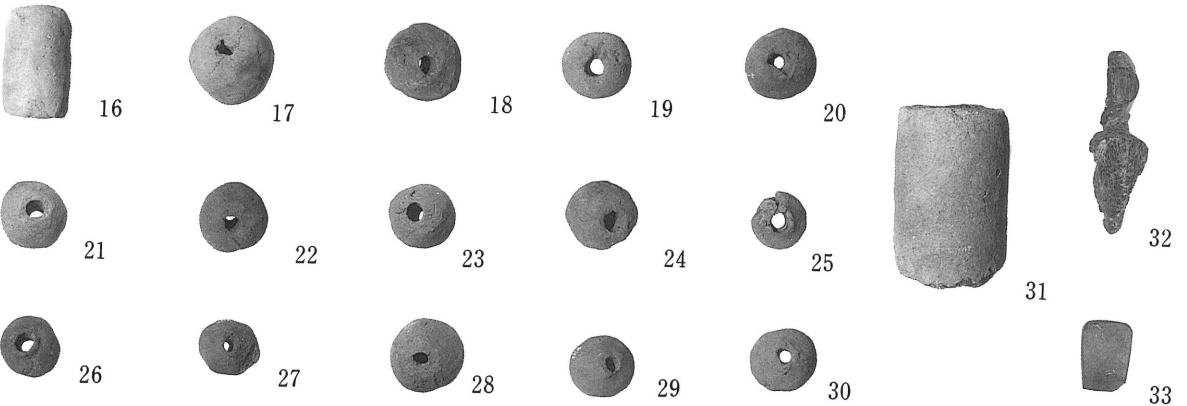
1号住居跡

出土遺物
上横峰遺跡

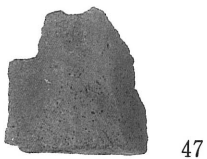
図版 5



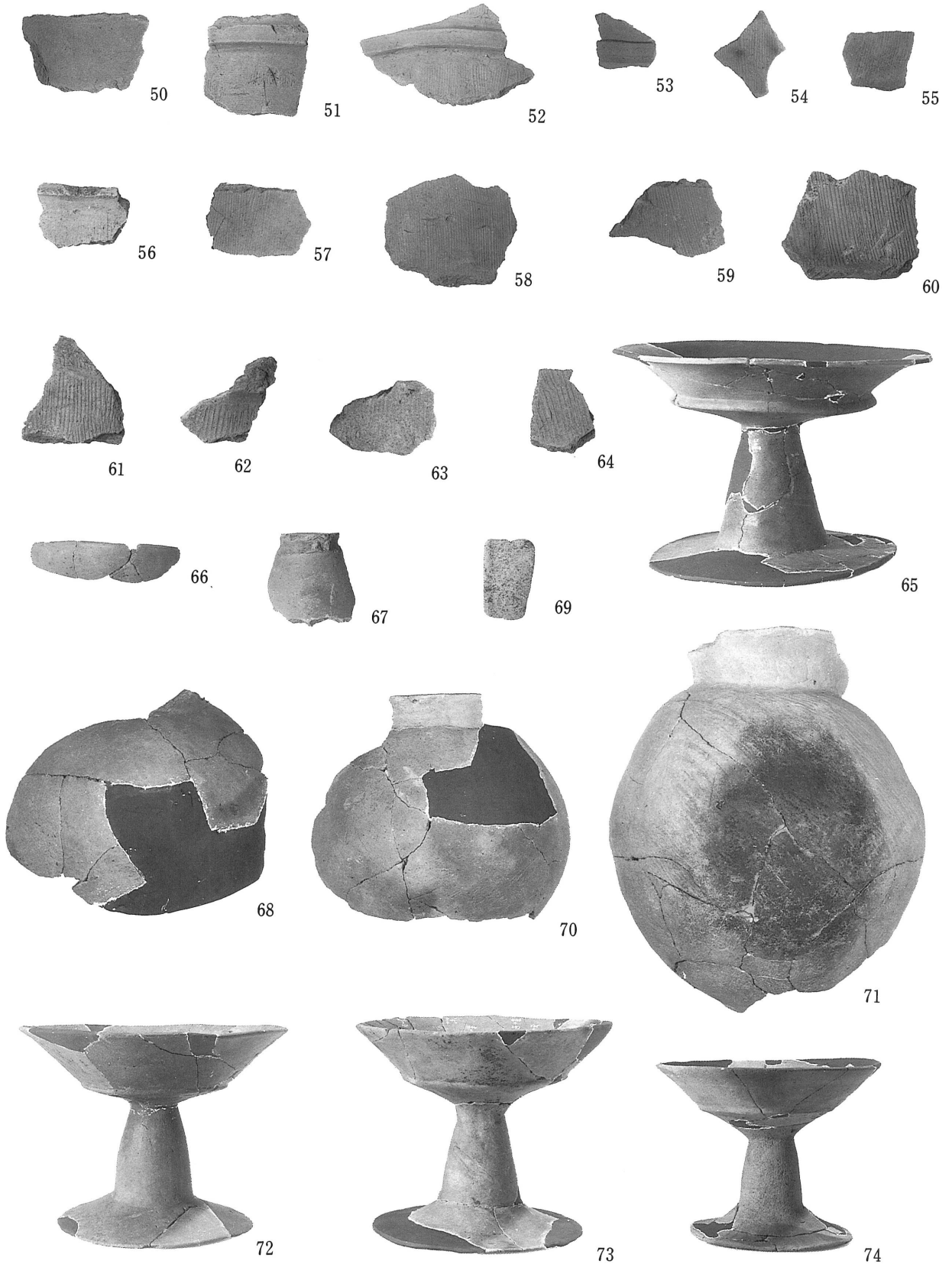
茶ノ木遺跡



上野合遺跡



9・12 3トレンチ 1・4 / 10 2トレンチ 2 / 11・33 6トレンチ 3・25 /
13~32・34~44 1トレンチ 5~24・26~28・30~37 /
45~49 2号遺構 1~5



50 11トレンチ7 / 51~54 5トレンチ8~11 / 55~61 3号遺構12~18 /
62~64 8トレンチ19~21 / 65~71 4号遺構1・3~8 / 72~74 5号遺構1~3 /



75



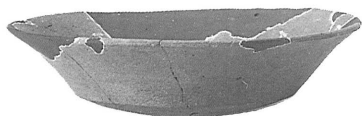
77



78



79



76



80



81



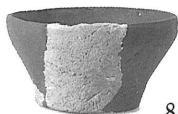
82



83



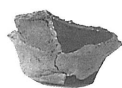
84



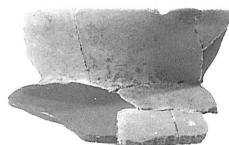
85



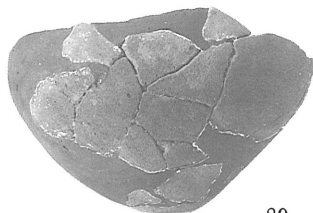
86



87



88



89



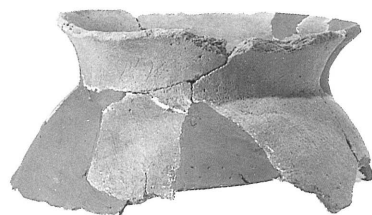
90



91



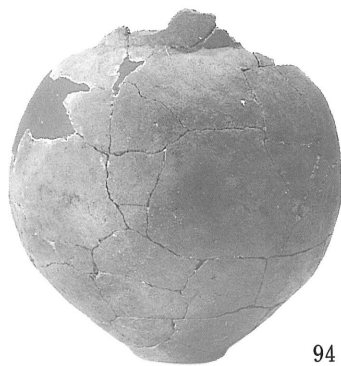
92



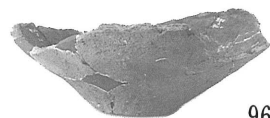
95



93

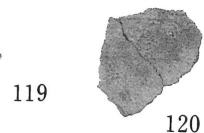
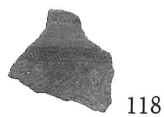
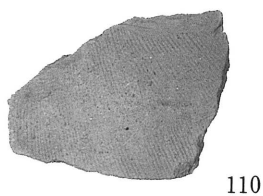
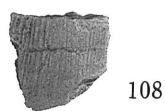
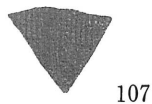
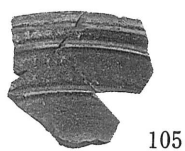
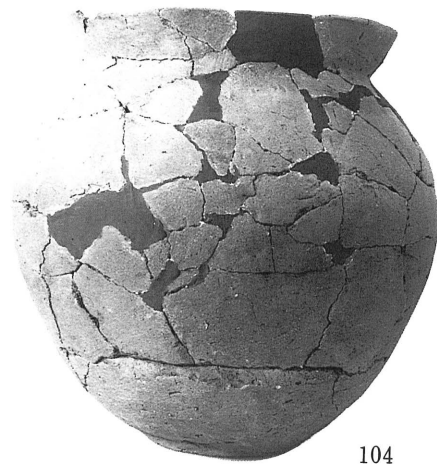
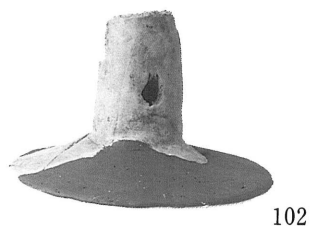
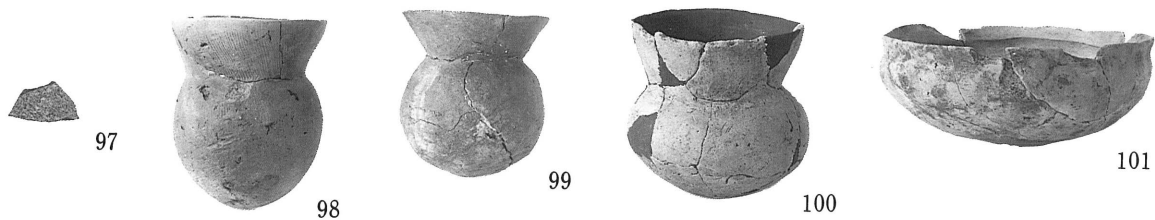


94

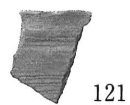


96

上野合遺跡



徒士橋遺跡



97~112 7号遺構 1~16 / 113・114 9号遺構 1・2 /
 115~120 遺構外出土 a~f / 121~126 1~6 /

平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告

平成2年3月15日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

市原市馬立 817 番地

発行 千葉県市原市教育委員会

市原市惣社 1040 - 1 番地

印刷 三陽工業株式会社

市原市五井 5510 - 1 番地